

---

# 蒼日記

SCHIP

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼日記

### 【Nコード】

N3820D

### 【作者名】

SCHIP

### 【あらすじ】

本当の愛って何だろう。。。中年男とネットアイドルの哀しい実録恋愛日記。。。。

## 第1章 プロローグ

誰かに聞いて欲しい・・・

でも、それは、知り合いには言えない・・・。

これから、俺はそんな日記を書こうとしている。

”この事”を知った深い付き合いのある人間はたった二人。  
一人は俺が敬愛してやまない、某作家氏。

・・・・・・絶縁 された（苦笑）

（今は、以前の関係に戻ったけど）

もう一人は、年下の親友、某デザイナー氏。

「怒ってはいないっすけど・・・馬鹿だなんて思いました」  
って言われた^^；

今、この時でも、この事を書くのに躊躇いはあるけど、  
全てをぶちまけて楽になりたい・・・そんな思いが強い。

いつの話なのか・・・誰の事なのか・・・

これははっきりと書かないでおこう。

俺の現在の仕事。

アイドル産業の末端を泳ぐ新興会社。

若くして人生の墓場（笑）に入っただので、子供は二人。

高校生＆中学生の & 。

元ヤンキーだった俺は、20代から馬車馬のように働いた。

24歳の時、独立、自分の会社も創った。

とにかく、それから、家族の為、自分の為、ひたすら働く日々。

その後。今の会社と平行して、のアイドル産業に進出。  
新興の自分の会社は、後発とあって、既に確固たる基盤を持つ  
老舗の会社には太刀打ち出来ない。  
何か・・・インパクトを。

そこで・・・俺は「アオイ」と出会ってしまった。

アイドル・・・アオイ。

もちろん、日々ブラウン管に映し出されるメジャーアイドルとは  
違う。

・・・ただ・・・彼女には、無数のコアのファンがついていた。  
彼女のネットワーク。それは、まさに”ネット”

100万Hitの。アイドル。

この娘・・・うちで売り出そうっ。そう・・・俺は決めた。

## 第2章　胎動

アオイと俺の出会い・・・。

それは、アイドル産業へ進出するずっと以前の事だった。

ある事がきっかけで、彼女とは、月に数度、PCを通したメールで会話するようになった。

アオイは自分の子供達と片手程度しか変わらない年齢・・・。  
当然・・・俺とアオイの年齢は20近く離れている。

それでも・・・。

サイト上で見る彼女は、とても純粹で思いやりがあり、  
実際、メールのやりとりの中でも、相手を気遣う言葉や思いやり  
が溢れていて、いつしか、俺は彼女の魅力に引かれていった。

まるで、娘のような・・・でも・・・今思えば、それ以上に  
”女性”を感じていたのかもしれない。

アオイとは、そんなメル友状態が続いていた中で、  
俺は新たなビジネスに打って出た。

それが、アイドル産業への参戦。

もちろん、この事業を興した時、俺の中で、アオイの存在は  
皆無だった。

業界に通じるたくさんの友の応援や協力も有り、順風満帆の  
船出では有ったけれど、やはり、それでも新興勢力が  
簡単に割って入れる甘い業界では無い事も、また、事実。

或る時・・・。

アオイとの何気ないメールのやりとりの中で、  
気がつけば俺はそんな話を愚痴っていた。

「もし、私が協力出来る事があれば、何でも言うてくださいね」  
アオイからの返信。

その時、俺の中で何かが・・・弾けていた・・・。

”既存のアイドルには頼らない。アイドルはうちで創っていけばいいっ！”

うちの広告塔はアオイでいい。アオイの関連グッズを創ってそれをメイン商品として売り出そう

俺の中で漠然と会社の進む方向が決まった瞬間だった。

後は、アオイにこの話をどう切り出すか・・・。

彼女は果たして首を縦に振ってくれるだろうか・・・。

会社がスタートして1ヶ月。

俺は自分なりのビジョン・・・計画をアオイに打ち明け、彼女に協力を求めた。

### 第3章　声

アオイに協力してもらおう・・・。

そう決意し、彼女にメールを送った。

それから、数日。

彼女からの返信は、こちらの要望を100%満たす  
答えだった。

当社の広告塔として、雑誌等媒体においてのアオイの写真掲載。  
アオイのオリジナル商品の独占販売・・・。

色よい返事を貰った俺は、何度かのメールのやり取りの後、  
彼女に

「アオイちゃん。ついては、私の会社との正式な契約書を  
作成します。契約書を持って伺います」

こんなメールを送った。

・・・しかし・・・彼女からのメールは

「ス キップさんの会社に協力する事は、今までお話したように  
全てOKです。ただ・・・会う事は勘弁してください」

。 アイドル・アオイは頑なに、リアルワールドでの接触を  
避けていた。

サイト上では、たくさんの自分自身を公開し、たくさんの映像、  
画像を日々、多くのコアなファン達に晒しているというのに。

「ス キップさんに会って・・・サイトの写真と実物が違うと  
思われるのが、嫌なんです。もちろん、そんな事直接言わない

でしょうけど・・・思われる事・・・それだけで嫌なんです。」

頑なに会う事を拒むアオイに、俺は一時的に諦めるしかなかった。

その後も、仕事上の打ち合わせはPCのメールによって成されたが、細かい部分がどうしても、もどかしく、ついには、彼女の方から、携帯と携帯メールを教えてくれた。

PCのメールから、携帯のメールへ・・・。

もどかしさは無くなり、打ち合わせも順調に進むうち、携帯の気軽さからか、話題はプライベートに至るまでになっていた。

俺の中の計画。

やはり、彼女にはリアルワールドに出て来てもらわないとならない。何故なら・・・アオイの商品を発売する時は、

当社でのイベントやりたい・・・。当人不在のイベントは出来ない・・・。

何とかしないと・・・。

「アオイちゃん。契約書の問題もある事だし、

詰めて話さなければならぬ事がたくさんあります。電話で話しましょう」

「・・・会うのは・・・駄目ですが、電話なら・・・いいです」

彼女からの返信。

それから数日・・・俺はアオイの声を初めて・・・聴いた。



## 第4章　動

アオイと知り合って1年・・・。

その日、俺は初めてアオイの　声　を聴いた。

俺はアオイの倍近く生きているというのに、  
緊張していた。

それは・・・この一年、自分の中で芽生えてしまった  
「仕事」以外の部分・・・その想いが俺を年甲斐も無く  
高揚させていたのかもしれない。

初めて聴く彼女の声は、20歳という年齢を充分に  
感じさせる瑞々しい・・・俺の想い描いていた  
アオイの声、そのものだった。

仕事の話を数十分・・・。  
時間の経つのがいくらか早い気がする・・・。

その後は、これまで何度も繰り返されてきたメールと  
同じように、お互いの話を尽きる事なく話した。

「私・・・実は対人恐怖症かも。人の顔がちゃんと見れない。  
いつも、人の目を気にしてる・・・。」

明るく、元気に振舞う”アオイ”というアイドルは  
彼女が作り出したもう一人の自分。

この後、アオイと俺は、濃厚な時間を共有する事になって

いくけれど、この時の俺は、まだ、アオイの中にある”闇”  
や、”対人恐怖症”の裏にある彼女の大胆な”裏返し”  
を知る由も無かった。

「アオイちゃん。それなら、尚更もつと意識して表に出ないと駄目だよ。うちの仕事がいいきっかけじゃないイベントやろう！そして、君のサイトのファン達に来てもらおう！

もつと自分に自信を持って！アオイちゃんは可愛いんだから」

アオイは、今の自分を変えたい、変わりたい、そう望んでいた。

俺は自分の仕事はもちろん、何とか、この娘の力になりたい  
そう強く思っていた。

いや・・綺麗事は辞めよう・・・この時、俺はまだ見ぬ  
アオイに恋していた・・・。

「ス キップさんの 声 って私好きです。優しそうで・・」

今思えば、アオイが俺を”男”として意識したのは、  
この最初の電話、この時だったのかもしれない。

## 第5章 アプローチ

アオイの声を聴いたその日から・・・彼女との仲は公私共、急激に近しくなっていた。

日々、携帯へのメール、繰り返し返される電話。

二つの異なる仕事を抱える俺は、夜・・・大概は一人オフィスに居残る事が多かった。

そんな時・・・気が付けば、受話器を手にしていた。

「本当の私を知ったら・・・ス キップさん・・・引くと思うよ・・・」  
アオイは会話の中で、決まってそう言った。

「私は悪い女なんだ・・・私からは絶対に電話をかけない。  
だって、お金かかるし、だから今だってス キップさんに  
かけさせてるでしょ？」

清纯派アイドル・アオイは等身大の自分を少しずつ俺に見せ始めていた。

良かったのか・・・悪かったのか・・・お互いの意思疎通が  
スムーズにいき始めた頃、俺は本題を切り出さなければ  
ならなかった。

「アオイちゃん・・・。会社として、きちんと契約書作り  
ました。お互いに署名・捺印して無事締結んだけど、  
・・・やっぱり、俺・・・会いに行くよ。」

契約もお互いきちんと交わしたいし、例の商品の件もあるし」

この時、既にアオイ関連の商品化は具体的に進められていてアオイから、ある物を多数受け取るだけになっていた。

「・・・仕事なんですよね・・・ス キップさんと会うのも・・・会います・・・。」

彼女は観念したように、何処か、以前ひたすら会う事を拒んだ頃とは違い、さばさばした口調でそう言った。

彼女の住む街。地方都市。当然、新幹線で向かう事になる。

アオイと会う事はもちろん、仕事の一貫。

ただ・・・それ以上に俺の気持ちは高鳴っていたのも事実だった。

「ス キップさん。こっちに来たら 一緒に食べたいです」

・・・彼女もまた、俺と同じ思いだったのかもしれない。

## 第6章　怖い・・・

「怒ってはいっすけど・・・馬鹿だなあ～って思いました」

アオイに關しての商品を全て担当してくれた、年下の親友デザイナーT氏・・・。

ずっと後に彼から、俺はこんな言葉を吐かれる事になるとは・・・アオイに逢うため、新幹線に揺られる俺にはその時想像も出来なかった。

アオイに逢う。

これは仕事だ・・・仕事なんだ。そう思いつつも数時間の車中・・・俺はまるで修学旅行に向かう学生のように高揚する気持ちを抑えきれなかった。

待ち合わせ場所は、新幹線が停車する某駅。

朝起きて・・・自宅付近から・・・電車に乗って・・・新幹線に乗り継いで・・・何度も俺はアオイにメールを送っていた。

新幹線に揺られ、数時間。

とうとう、アオイの住む街に俺は降り立った。

駅構内のショッピングモールをぶらぶらと歩く。  
その間もアオイとのメールは続いていた。

「今・・・モールに入った入り口付近の本屋の前にあります。  
アオイちゃん。判りますか？」

「はい。私もそこも向かっています」

この前日。

「私・・ス キップさんのスーツ姿が見たいです」

もちろん、俺は普段、スーツが普段着なので、当たり前  
の格好。

この時も当然スーツ姿だったけれど、どうも俺のスーツの  
センスは、同年代のリーマンとは違うらしい（苦笑）

元々は、ヤ キー^^なので、スーツ・ネクタイ・  
ちよつと普通の方々と趣が異なる・・ようで。

アオイと俺。

携帯で話しながら、お互いの姿を求めている。

「あつ！ス キップさん・・・？見えました・・」

アオイの電話から聞こえた声と同時に、俺の視界に一人の  
娘が飛び込んできた。

「ん？アオイちゃん？」

お互い目線が逢った時・・・彼女は何故か・・・  
走って逃げ出していた（苦笑）

俺は急いで、アオイだろう・・・その娘の後を追ひ、  
シヨッピングモールの雑踏の中、彼女の手を掴んでいた。

「アオイちゃん？ですよね？ス キップです。」

アオイとの初めての出会い。

一瞬・・・俺を見た彼女の第一声は・・・

「じつ、怖い・・・」

・・・だった。  
(苦笑)

## 第7章　ガラスのアオイ

早朝といっても、ショッピングモールは大勢の人であふれている。そんな中、うつむき紅潮する若い娘の手を掴む怪しいおっさん（笑）

「アオイちゃん・・・なんか・・・俺・・・人攫いみたいだよとにかく、喫茶店でも入って落ち着きましょう」

アオイは依然として、顔を上げる事はせず、小さく”はい”と消え入りそうな声で答えた。

俺はこの雰囲気を変えようと、目の前にあつた喫茶店へと彼女を誘った。

正面に見るサイトの写真では無いアオイ・・・。

彼女は頑ななまでに俯いたままで、俺を見ようとはしなかった。

「サングラス・・・かけていいですか？」

席につくなり、アオイはそう告げて、カバンから取り出したサングラスで俯いたまま、顔を覆っていた。

この娘の対人恐怖症・・・本当だったんだ・・・。

今更ながらに気づいた俺は、何をどう切り出しているのか、判らなかった。

サイト上のアオイ。



それは、癒し系アイドル王道とも言える・・・まさにそんなアオイを期待するコアなファン達に答えるかの如く、優しさを全面に押し出した厳選された画像のみをアップしていた。

既存のアイドルで言えば誰だろう・・・。

アイドル・・・では無いのかもしれないが、大塚 愛か？

今、俺の目の前で、俯きながら、時々怯えた目線で顔を上げる等身大のアオイは・・・柴崎コウ。これが俺のアオイを見た第一印象だった。

俺の問いかけや話に時折、顔を上げるものの、すぐに俯いてしまうアオイに、俺は壊れてしまいそうな硝子・・・そんな脆さに衝動的な愛しさを感じていた。

「アオイちゃん。とりあえず、ここじゃ何だしアオイちゃんが食べたがっていた、あれ・・・食べにいこう。食事しながら話そうよ」

緊張の解けないアオイに、俺はそう話を振って、二人はとりあえずショッピングモールを後にした。

二人・・・歩きながら、ふと気づくと、彼女の荷物が重そうだ。

「持とうか？」

俺はそう言うと同時にアオイの荷物を手にしていた。

モール街を出るまで、いくつもの扉があった。

素早く扉を開け、アオイを先に通す。

俺としては、言われて思い出す・・・そんな小さな振る舞いも二十歳のアオイには、何故か新鮮に写ったらしい。

「男の人にこんな事してもらうの初めてです」

この日。

俺は初めてアオイの眼をしっかりと見た瞬間・・・

そして、それは、初めて見たアオイの笑顔でもあった。

## 第8章　二人だけの時間

俺の知らない土地・知らない街・行き交う知らない人々・。雑踏の中、ずっと以前から知ってた・。それでいて初めて逢ったアオイ・。。

そっけない 他人 の街を、俺は唯一 他人 でないアオイと歩いていた。

彼女が行きたかった店。

「友達が行って、凄く美味しかったっ！って言っていました。だから、私も・。行きたいなあって思ってた・。」

今日以前、メールでアオイは、この店に行く事を楽しみにしていた。

駅から歩く事、数分。

と或るファッションビルの最上階にその店はあった。

個室での会席。

アオイと俺。会席料理という、たつぷりと時間をかけたスタイルの食事は、

俯いたままのアオイをゆっくりと・。安心出来る空間へと懐柔させていた。

「うわっ・。何だろ、この料理？」

「美味しいですっ。初めて食べましたっ」

この場に来て、俯き俺を直視出来なかった彼女だったが、次つぎに運ばれる料理に、アオイはイチイチ感嘆の声をあげいつしか笑顔での・・楽しい食事の時間に変わっていた。

アオイが掲載される予定の雑誌を説明したり、商品の仕上がり具合・・仕事の話も順調に進み、2時間。個室での会席が終る頃には、お互いが目と目を合わせ、時に笑いながら、冗談を言いながら、自然な会話が出来るまでになっていた。

### 契約の締結。

契約書にアオイのサイン、捺印がされ、当社からの契約金がアオイに支払われた。

「ス キップさん。ここ出たら・・もう帰っちゃいますか？」

アオイとの契約も締結し、商品の問題もクリアされた今、俺がこの地に残る特別な理由は無かった。

でも・・既にこの時、俺の正直なまでの感情は

もう少し・・出来るならもう少し・・アオイと一緒に  
いたい・・

「ス キップさん。私、この契約金戴いたら、どうしても買いたかった

服があるんです。もし良かったら・・一緒に見てもらっていいですか？」

アオイのこの申し出は、俺を喜ばせた。

「もちろん。いいですよ。行きましょう」

それから、俺はアオイのショッピングについてまわった。

買ったかった服があるといいながら、多くの服を手に取り悩むアオイの姿を俺は、ずっと見つめていた。

この暖かい湧出る感情はなんだろう。

我が家でも、すっかり年頃になった娘を思う感情・  
でも、決してそれだけで無い事も俺自身、自覚していた。

「ス キップさん。私欲しかった服、これなんですけど、私に似合いますか？でも高いんですよ、この服・・・」

「アオイちゃんは、この服が欲しかったんでしょ？」

「はい。でも、これ買っちゃうと実は他にも欲しいものがあるんで迷ってます・・・」

「アオイちゃん。じゃあ、この服は俺がプレゼントしよう。うちの契約金は、その、他の欲しい物に使いなよ」

それは駄目です！　そう言って拒否するアオイを半ば無視する形で、俺は、“アオイが欲しかった服”をプレゼントした。

「ご両親には言っちゃ駄目だよ。余計な心配させちゃ悪いからね」

アオイと俺。二人だけの時間は、気がつけば6時間を

超えようとしていた。

## 第9章 夜

この日、アオイと初めて出逢うまで、俺達二人は、電話で、メールで、多くの時間を共有してきた。

癒し系を売りにするアイドルで有りながら、等身大のアオイは、何処かさっぱりした性格だと判ったり、それでいて人前に入る事を極度に怖がっていたり……。

こうして、二人会う事。更にその先にイベントを行う事。

アオイは少しずつ気持ちを変化させていった。

それは、「俺」という存在が彼女の中で変化していった事を意味していたと思う……。

実際にアオイの声、言動、その全てが俺には可愛らしかったし、愛しい と感じていた。

俺はメールで、電話で「アオイちゃんは可愛いね」いつも、そう言っていた気がする。

俺の携帯料金に「0」が一つ増えるほど、アオイとの時間は知らず知らず生活の一部になっていた。

それでも……。

初めて会ったアオイは、前出のように

しばらくは会話も出来ず、俺の顔さえ見ようとしなかった。

暑いのは苦手です……すぐに顔が赤くなっちゃうので。

そう言っていたアオイ。でも、もうその心配は無くなりつつあった。

何故なら、もう陽は傾きつつあったから……。

「ス キップさん。私ってお酒全然のめないんですう。でもねっ、お酒のむと、いつも強がってる自分じゃ無くなって凄く素直になっちゃうんです」

「ふーん……。そうなんだ。酔ったアオイちゃんも見てみたいな」

「この前・・・友達と言った居酒屋さんがあって、そこって凄くいい雰囲気なんですよっ。私は少しので気持ち悪くなっちゃったんですけど・・・お酒をのむところは好きなんです。」

「アオイちゃん。そこ・・・行く？」

俺は衝動的にアオイを誘っていた。

既に陽もくれて、この“他人の街”にも、夜を告げる灯が除々に灯りだしていた。

「はい」

アオイは短くこたえ、そして、嬉しそうに笑った・・・。



## 第10章　掌に置かれたもの

モスコミール。

初めて逢ったこの夜。そして、これから幾度が過ごす夜。  
アオイはいつも、このカクテルをオーダーした。

「お酒・ホントに弱いんです。でも、これって  
ジューズみたいでのみ易いでしょ？」

ほの暗い店内は個室で仕切られ、目の前にいるアオイだけが、  
俺の眼に映っていた。

この日・俺にとって朝から続いている”二人だけの時間”は新幹  
線、  
帰りの時刻を忘れさせていた。

「ヤバアイですう。信じられないっ」

これから、何度も聞く事になるアオイの口癖。  
アオイはそう言つと、少し赤らんだ顔でうつむいた。

「何？どうしたの？」

「これ・・・このモスコミール・・・お酒いっぱい入ってますう  
信じらんないっ」

確かにアオイの顔は、グラス半分程のモスコをのんだ時点で  
ほんのりと赤らみ、視線もどこか、宙を泳いでいた。

「本当に？何だか、見た眼はジュースっぽいじゃない。本当にアオイちゃん、酔っ払っちゃったの？」

「じゃあ！ス キップさん！呑んで見てください。ジュースじゃないですよ」

アオイは少し、ふくれた顔をして自分のグラスを俺に押し付けた。

今日の朝、初めて逢ったアオイ。

うちの会社の” 宣伝商品 ”として契約したアオイ。

アオイの口をつけたグラスを、当たり前のように、俺は今、口をつけようとしている……。

大体……なぜ……俺は今、この遠い見知らぬ街で、二十歳の娘と、こうしているんだろう……。

これから、俺を苦しめる”なぜ？”

最初に、そう思ったのは、この時だったのかもしれない。

信じられない事に、アオイはグラス半分のモスコミールで、一人でしっかり歩けない程、酔っていた。

「私……酔っ払うと、誰とでも友達になっちゃうんですよ。いろんな人とたくさん喋っちゃうんですよ」

小柄なアオイの身体を、支えながら、居酒屋を後にし、俺は駅へと向かった。

「少し休んでいいですか・・・」

俯いたまま、少し辛そうなアオイを駅まで続く繁華街の一角にあるベンチに座らせた。

下を向いたまま、呼吸の荒いアオイ。

「私・・・酔っ払うと、弱くなっちゃう・・・  
それで泣いたりするんですよ」

そう呟きながら、酔い覚ましにと俺が差し出したガムの包み紙で、アオイは俯いたまま、「鶴」を折っていた。

アオイとの”関係”が深まるにつれ、アオイの過去を知る事になるが、今の俺には、”泣きたくなる”アオイの想いを理解する事が出来なかった。

ただ俺は、アオイの折った「鶴」が、俺の掌にそつと置かれ俺をじつと見つめるアオイを見た時

強く抱きしめてやりたい・・・。そう思った。

それは、掌に置かれた「鶴」が、折り紙では無く、アオイの心そのものだと感じたからかも知れなかった。

俺はこの時、今にも、壊れてしまいそうな脆さをアオイに感じていた・・・。

## 第11章　心の恋人

俺の妻。

既に、天涯孤独の身。

義父は、彼女と俺が出会う遠い昔他界していた。  
義母。彼女と共に見送った。

妻と二人の子供達。俺が懸命に生きてきた証。  
何よりも守ってきたものだった。

「契約はうまくいったよ。これで彼女の商品は  
うちで販売出来る。遅くなっちゃったけど帰るよ」

東京に向かう新幹線の中、俺は妻にメールを送った。

家庭に、妻に何の不満も無い。

むしろ、こんな俺をいつも助けてくれる妻には感謝  
している。

しかし・・・。

俺は妻にメールを送った後、もう一つのアドレスを  
開いていた。

「アオイちゃん。今日は遅くまでご苦労様。そして、  
ありがとう。アオイちゃんはサイトのイメージとは違いましたが  
、やっぱり、可愛い女性でした。」

正直に書けば何度も・・・抱きしめたくくなりました・・・」

アオイからの返信。

「ス キップさん。 食事も洋服も、たくさん有り難うございました。

ス キップさんが本音という事で。

私も…。

今日一日一緒にいて、何で結婚してるだろうって何回も思いました。結婚している事以外・理想の人でした。

”心の恋人”です（恥）キモイって思わないでください”

心の恋人。

この言葉、実は俺自身が何度もアオイに使っていた言葉だった。

「アオイちゃんは、俺の心の恋人だから」

新幹線車中。この時の俺は、そんなアオイのメールに嬉しさこそあったものの、何かが始る。。そんな予感すら感じていなかった。

時間を少し戻すと。

繁華街のベンチで休憩した、俺とアオイは、真っ直ぐ駅へと向かった。

俺は帰らなければならない。

すっかり、酔いのさめたアオイと俺は、駅に続く地下街を歩く。

この時、二人の想いはたぶん一緒だった。

どちらともなく、駅構内の喫茶店に入り、時計と睨めっこしながら  
尽きる事なく、話続けた。

次の新幹線・・・そして次・・・また次・・・俺は帰京時間を遅らせ  
ていた。

もちろん二人だけの時間が終る事を惜しんで。

もう。帰らないと。

新幹線の改札。アオイと俺は握手して別れた。

数歩歩いて、振り返ると。

アオイの姿は既に無かった。

## 第11章　心の恋人（後書き）

昨日1月5日より公開を始めましたが、読んで下さった方々に御礼申し上げます。

『蒼日記』は全61章の予定です。  
どうぞ宜しくお願い致します。

## 第12章　放たれた心

アオイと初めて逢ったあの日以来、俺とアオイのメールや電話はより一層頻度が増していった。

それは・・・既にデートと言っても良かったのかもしれなかった。

ただ、あの初めて逢った日の最後のメール以来、お互いにお互いの気持を意思表示する事は無かった・・・。

自分のHP上で、癒し系アイドルを演じるアオイと、俺が知ってしまったアオイは、彼女との親密度が増すにつれ、全くの別人と想える程、俺の中で変化していった。

真実のアオイ。

それは、毎日その時々によって違う彼女が出現する・・・まさに俺にとって戸惑いの毎日が始った。

或る時は甘い声で。。また或る時は誰も寄せ付けないような凍るような声で。。彼女の心の変化は激しかった。

そんな或る日。

いつもの様に電話すると、そんな気性の変化の激しいアオイにしても、珍しい程、その声は深く落ち込んでいた。

「アオイちゃん。今日はどうしたの？何かありましたか？



凄く沈んでるみたいだね・・・心配です」

俺の問いかけに、最初は”何でも無いですっ”の一点張りだったアオイが、俺の執拗な問いかけにようやく、重い口を開いた。

「ス キップさんには今まで言いませんでしたけど・・・私3年付き合ってる彼がいました。でも別れました。」

初めて聴いた話。

既に、この時、俺の心は”アオイのもの”だったし彼がいた・・・その事実になんか俺はショックを覚えていた。

ただ次に放ったアオイの言葉。

それは激しく俺の心を揺さぶるものだった。

「ス キップさんに逢ったせいです。ス キップさんに逢った”あの日”彼に別れを告げました。」

恋愛。誰かを好きになる事。それは理屈じゃない。

まして、相手に何か、見返りを求める事、それは愛とは言わない。それが俺の恋愛感。

俺はアオイを愛してしまっていた。妻も子供もいるという現実があるにも関わらず。

だからこそ、この秘めた想いは、”心の恋人”そんな言葉の中に押し込めている自分がいた。

しかし。

アオイのその一言は、俺の中のそんな想いを  
開放させる、そんな一言だった。

### 第13章　彼氏

「彼にとって、私が初めて付き合う女性だったんです……ス キップさんも知ってるでしょ？」

本当の私は我儘だし、そんなに可愛くないのにプライド高いし……。だから、いつも彼とは喧嘩してて……。

それでも、自分の素をそのまま出せたっていうか……。だから、3年も続いたと思うんです。

だけど彼は独占欲が強い人で、私が他の男の人と話す事を一切許さなかった。

もうそんな束縛は嫌だって思ってた時……。ス キップさんと会ってしまって……。

それで、彼には”あの夜”別れるって言いました。

そしたら彼逆上して『アオイと別れるくらいなら死ぬ』とか言い出して。

あれから、毎日、毎日電話が来るんです。

だから、携帯も出ないし、家の電話線も切ってます。

ただ最後に電話で話した時……。彼が

『もついいっ！判った！別れてやるよ。手切れ金やるよ』  
って言うんです。

手切れ金？って私にも意味がわからなくて・・・  
いない　って言いました。

そしたら、彼が『じゃあ、お前の実家に送る！』って言うんです。

私・・・おかあさん大好きだし、そんな事されたら・・・

お母さんに心配かけちゃう！

だから、辞めて！って言いました！

それで、手切れ金って何の事かわからないけど、どうしても  
送るって言うなら・・・実家でなく、こっち（アオイのアパート）  
に送って！って言いました。

そしたら彼が

『結局、金欲しいんだろっ！』って

電話の向こうから聴こえるアオイの声は涙と屈辱に  
震えていた。

堰を切ったように話続けるアオイの声を俺を黙って  
聴きつづけた。

俺のアオイに対して芽生えてしまった愛情は、今まで俺自身  
経験した事の無い”愛情の形”だった。

年齢の違いが大きい事が原因なのか。。

とにかく、彼女への その形 は  
放っておけない！支えてやりたい！いつも側に居てやりたい！  
そんな感情の中にあつた。

俺にとって、そんな愛情の形は、とても新鮮だった。

涙で途切れ途切れのアオイの声を聴きながら、どうしようもなく  
アオイを、愛しい と思った。

「アオイちゃん。死ぬ死ぬ言ってるヤツで実際死んだヤツは  
いないよ。もう忘れた方がいい。

アオイちゃんは、まだ、彼に対して、愛情のカケラを残してる？」

「無いです…悔しいだけです」

「じゃあ、もう、無視すればいいよ。別れ際に悪態をつく  
ようなヤツはまだガキだって事だよ。

それでも、今後、あんまり酷いようなら俺に彼の連絡先  
教えて。教育的指導してやるよ」

何とか、アオイの興奮状態も治まり、いつしか、すぐ先に迫った  
イベントへと話は移行していった。

イベント開催日は日曜日。

彼女の商品が我が社から発売される日でもあった。

「あゝあゝ、久しぶりに東京に行くのに、日帰りかあゝ  
デイズニールランド行きたいなあ」

電話の向こうで、溜息と一緒にアオイは呟いた。

「アオイちゃん。前の日…土曜日から東京に来る？  
デイズニールンド、一緒に行こうかつ？」

気がつけば。

俺はアオイにそんな言葉を投げかけていた。

## 第14章〜TDL〜

デイズニーランド。

イコール苦痛の場所（苦笑）すっかり、おっさんの俺にはまさにそこは、そんな場所だ。

それでも、つい投げかけてしまった俺の言葉に、ついさっきまで、涙声だったアオイの声は歓喜の声に変わっていた。

「本当ですかーっ！うれしいです。私、プーさん大好きなんです。でも。。。ス キップさん仕事もあるし。。。」

俺は自分の会社を旗揚げ以来、この20年近く一度も会社を休んだ事は無かった。

39 の熱を出そうが、仕事で使う電動カッターで指を持っていかれそうになった時も。そして、敬愛した義母の葬式の日でさえも・・・。

「いいよ・・・アオイちゃん。行こう、TDL。仕事は何とかするよ」

20年間の俺の仕事への想い。

その時のアオイへの感情は、いとも簡単にそれさえ凌駕してしまっていた。

「ス キップさん！ランドもいいんですけど、デイズニーシーって行った事ないですう。そっちも行きたいな」

「アオイちゃん。今回は、どちらかに行きましょう。そして次にまた、行かなかった方に行きましょう」

俺はアオイにそう告げた。

彼女の喜びようは、38歳の俺には理解出来ない程のそれだった。

しかし。次の無い事を俺たち二人。。。この時は想いもしなかったし、想像すら出来なかった。

「ス キップさんっ。じゃあ、考えていいですか？どっちに行くか楽しみですっ。ありがとうございます。」

親友のMちゃんにどっちがいいか訊いてみますっ」

アオイの親友Mちゃん。

彼女の存在が、俺とアオイの最初の亀裂の原因となるけれど最後のTDL同様、俺たちには、そんな未来の出来事を知るよしもなかった。

アオイが東京に泊まる。

それがどういう意味を持つのか俺はもちろん、アオイも考えていたに違いなかった。



## 第15章　再会

「ス キップさん。私今回はやっぱりランドに行きたいですう。友達のMちゃんもランドの方が面白いって。」

あゝMちゃんって凄いですよ。同級生なんですけど、今30歳の人と付き合ってたて・私よりずっと大人っぽい。今一番仲良しなんですけど。」

デイズニーシーは次にとっておきます」

イベントも間近に迫ったある晩、既にいつだったのかも特定出来ない。何故なら俺とアオイの”電話でのデート”は毎晩欠かさぬものとなっていたから。

イベント。

その道では、他の追隨を許さない程、絶大な人気を誇るアイドル・アオイだったが、サイト上の自分と現実の自分とのギャップに常に怯えていた。

サイトのファンとは、リアルワールドで一切交流を持たない。

それが、遂に、今回のイベントで 生身 のアオイそのものをさらけ出さなければならなかった。

イベント前日。俺とアオイが互いを意識してから始めて逢う日……。

新幹線の改札から出てきたアオイは、やはり、あの時と

同じ様に俯いていた。

俺は、そんなアオイを意識過多にさせないよう、彼女の荷物を持つと、目的地・デイズニールランドに向かう為京葉線の乗り場へと歩き出した。

「スキップさん。私、今まで付き合った人と一度も手……つないだ事ないんです。なんか。汗とかかくと嫌だし」

「じゃあ、手つないでいきましょうか？」

アオイは手をつなぎたかった。

唐突な彼女の言葉は、二十歳の娘の精一杯の表現だった。

こうして、俺とアオイという、年齢を超えた二人は  
迷路 に足を踏み入れてしまった。

## 第16章 ストラップ

朝から小雨が降る舞浜。

駅からランドまでの短い道程を俺とアオイは1本の傘で歩いていた。

この天候が幸いして、土曜日でありながら、ランド内は比較的空いていて、俺たち二人は、アオイが望むアトラクションを次々にこなしていった。

もちろん、ずっと手を繋ぎながら。

それでも、10〜20分は、どのアトラクションも待つ事となり俺達は並んで順番を待った。

「ス キップさん。。。何考えてます？」

待ち時間。時折会話も途絶え、俺は黙ってアオイを見つめていると、アオイにこう訊かれた。

「ん？別に何も。いや、アオイちゃんの顔、ただ見てただけだよ」

事実、その通りだったが、これから先、俺はアオイに何度もこの質問をされ続けた。

アオイにとって、沈黙は不安。

この後、俺はその事に気づいていく。

「私、本当はデイズニーの花火見たかったんです。でも、今日は花火をみるよりも、ス キップさんと呑みにいきたいな」

アオイと俺は、そんなアオイの提案もあり、朝から陽の沈む頃まで遊んだデイズニーランドを後にし、新宿へと向かった。

新宿。

今夜、アオイが一夜を明かす街。

そして、俺の大好きな街。

実はこの時点で、アオイが東京で一泊する事は決まっていたものの、共に夜を過ごす事については、お互い何も話していなかった。

新宿についた俺達は、歌舞伎町に無数に点在する居酒屋のひとつに腰を落着けた。

ランドで買った、お揃いの携帯ストラップ。

アオイが大好きなぶーさんの金と銀のストラップ。

「銀は私。金はス キップさんのね^^」

そう言うと、アオイは俺の携帯に、その金のストラップを付け出していた。

既に。

俺の携帯にはひとつだけ、やっぱりデイズニー

キャラクターのストラップが付けられていた。

中学生の娘が、俺に買って来てくれたストラップ…。

娘のストラップに、今、アオイのストラップが重なる。

俺は複雑な想いでアオイと、その指先にある俺の携帯を見つめていた。

そんな俺の胸中を知ってか、知らずか。俺の携帯を自分の携帯と並べて、にっこり笑い、俺を見つめるアオイがいた。

俺は何してるんだろう。。。

つい数ヶ月前には想像も出来ない、非日常の中の1日。

口を含むアルコールがいつになく、刺激的で、そんな僅かに残った俺の理性はいつしか　フウ　と消えていった。

## 第17章 アオイの過去

歌舞伎町の夜。。。

アオイはモスコミール。俺はビールから焼酎：日本酒。二人だけの楽しい時間はまたたく間に過ぎていった。

居酒屋を出た時。

アオイは初めて逢ったあの日のようにほろ酔いで、足元もおぼつかなかった。

ただ…あの日と違っていた事。

それは、アオイが躊躇なく、俺に身体を預けていた事だった。

俺とアオイは、歌舞伎町の外れにあるショットバーへ。

「ス キップさん。私ね、サイトでは”癒し系”とか言われて…でもね。16才の頃から淒く荒れてて。。。

私が中学の時、お父さんとお母さんが毎日喧嘩してて…

お母さんは毎日泣いてて離婚するって…。

私、お母さんが淒く可哀想だったんだけど、あの頃はやっぱり、そんな両親が二人共嫌いで、家で私…

キレちゃって…それで、夜とかあ毎日、外で遊ぶようになって…」

アオイは、心の傷を途切れる事なく、俺に話してくれた。眼に涙を浮かべつつ。。。

「ご両親。そつかあ、そんな事があつたの。  
何が原因だったの？」

「お父さんの浮気です」

・・・。

アオイと過ごした楽しかった一日が凍りついた。  
今まで心地よかったほろ酔いが一気に引いていくのが  
わかった。

俺は。

無言だった。

「なのに…私…ス キップさんの事好きになっちゃた」

アオイは、少し泣きながら、少し笑ってそう言った。

そのアオイの顔を見た時、凍てつき、俺の脳裏に浮かんだ  
愛しき家族達の姿は消えてしまっていた。

アオイが堪らなく愛しかった。

「アオイちゃん。もし、アオイちゃんが年をとって、  
人生を振り返った時。

俺は、アオイちゃんというアイドルを売り出した優しい  
おじさん。それだけで終りたくないです。

アオイちゃんの”彼”として名前を残したい…」

気がつく、俺はアオイにそう告げていた。

アオイは、少しだけ溢れた涙を拭いながら

「はい」

一言だけ、短くそう言ってほんの少し笑った。



## 第18章　俺達の長い夜

不夜の街・・・歌舞伎町・・・

もう既に時計の針は、日付を変えようとしていたが、シヨットバーは喧騒の中にあつた。

「アオイちゃん…。今夜、俺一緒にいてもいいよね。家にはイベントの仕事で外泊するって言つてある。」

「私、ス キップさんの事好きだし、信じてるから…。それに、ス キップさんは、私の嫌がる事、絶対にしないし」

俺とアオイは、日付の変わる頃、シヨットバーを後にした。

歌舞伎町。

どんな時間でも、何処を彷徨つていても、すぐにタクシーはやってくる。

まっすぐに歩けないアオイを乗せ、予め予約してあつたホテルに向かった。

「運転手さんつ。夜遅くまでお仕事ご苦労様です。ありがとうございますっ」

酔いのまわつたアオイは、しきりに何度も運転手に御礼を言い、その都度、恐縮しつつ困惑する運転手を、俺は可笑しさをこらえつつ、見ていた。

ほんの数分、車を走らせただけで、歌舞伎町の喧騒は嘘のように消え去り、同じ新宿の街とは思えない程、静かな場所でタクシーは止まった。。

とうとう。来てしまった。

もう俺自身後戻りは出来なかった、いや、後戻りする気は無かった。

今夜。俺は、愛する家族を裏切って、愛するアオイを抱く…。

ホテルの一室に入ると、アオイはすぐに、よろよるとおぼつかない足取りながら、シャワーを浴び、寝る為の支度を整え、ベットにもぐりこんだ。

俺はというと。冷蔵庫からビールを取り出し、また呑み始めていた。

何かが…。

この後に及んで、何かが俺の心を激しく揺さぶっていた。数時間、呑み続けたに関わらず、まだ、無意識にアルコールを欲している自分がいた…。

いいのか？…本当に…いいのか？

「ス キップさん…寝ようっ」

アオイが俺を呼んでいた。

日付は既に、”翌日”をさしていたが、

俺とアオイの長い一日・長い夜  
はまだ・始ったばかりだった。

## 第19章 涙

俺とアオイ…。

同じベットの中。。。触れてはいないが、アオイのぬくもりが伝わってくる。

「今日は楽しかったです。デイズニーも行けたし、お酒も少し呑んだしい。

ただ明日ってイベントなんですよね…。私に逢いに来てくれる人なんかいるのかな。私また顔上げられないかもしれないです。考えただけで緊張してきます…」

「大丈夫だよ。アオイち…」

そう言い掛けて、俺は彼女の眠るその方向に顔を向けた。

アオイはじつと俺を見つめていた。。。

その表情は、今日という楽しかった一日への満足感、そして明日のイベント、不安と怯えがにじんだ…。それは俺が思う、二十歳の女の子の表情とは、違っていた。

心の恋人。ガラスのアオイ。掌に置かれた折り紙。

俺の中で、アオイへの想いが溢れていた。

俺は、アオイの髪…頬…を優しくなでながら、溢れた想いを唇にたくした。

アオイは目を閉じて…その身体を全て俺に預けた。

「ス キップさん…ダメ…」

そういいながら、アオイの手は、しっかりと俺を繋ぎ止めていた。

俺たちは、何度もキスをし…俺はアオイの全てを愛した。

その瞬間までは。

アオイの呼吸が荒くなり、俺たちがひとつになる瞬間。  
俺の中で…何かが…崩れた…。

俺は重なるアオイの身体から、離れると、そのアオイの横に  
あお向けに寝転んでいた。

「ス キップさん。。どうしたの？なんで…？  
私が ダメ とか…やめてとか言ったから？どうしたの？」

アオイは、あお向けに天井を見つめる俺を不安気に覗き込んだ。

ここ数ヶ月、アオイを想い、そして、その感情が溢れた今夜。  
そして今、俺の中で封印してきた、もう一つの感情が  
溢れた瞬間だった。

「俺は何をしてる…愛する家族を裏切り、清純派アイドル・  
アオイのファン達を裏切り、アオイのイベントに来てくれる、  
イベントに協力してくれる友を裏切り、俺は今…  
何をしてる。」

アオイと俺。先の無い愛。今の俺の欲望だけで、この二十歳の娘といいのか。それで、アオイを愛していると本当に言えるのか…？」

俺はあお向けのまま天井を見つめていた。

どうしようもなく卑怯で情けない姿の俺が、その薄暗い天井に映っているように思えた。

俺の眼から少し涙がこぼれた…。

## 第20章　俺とアオイの物語

アオイの問いかけが、何度も聞えてきたが、その声は、何処か遠く、天井を見つめる俺は自らの心の痛みに耐える事、そんな想いでいっぱいだった。

何で…？

あお向けの俺を覗き込み、何度も問い掛けるアオイは既にその疑問を超えて、怒っていた。

「ス キップさん！何ですかっ！なんで、いきなり途中で辞めるんですかっ！」

本当に怒った時のアオイは、相手を全て拒絶してしまうかのような冷たい視線と冷たい言葉をぶつける。

この後俺は、突然変貌する、こんなアオイに度々苦しめられる事になる。

「もういいです！」

アオイは、俺に背を向け布団に潜り込んでしまった。

どのくらいいたっだろう…。

無言の時を経て俺はアオイの肩に手をまわし、彼女を呼んだ。

「ス キップさん！私の事どう思ってるんですかつ！  
好きなんですか？嫌いなんですか？答えてください！」

背を向けたままでも感じる事が出来る、アオイの冷たい目。  
アオイの怒りは収まるどころか、時間と共にその度合いを  
強めていた。

\*\*\*\*\*  
昔。。或るところに、一人の男がいました。

男は、若い頃のやんちゃを恥じて、結婚してから  
自分の為。家族の為に、ひたすら働き続けました。

それから十数年…。

男の前に、突然、神様が降り立ち、男にこう告げました。

お前は、ここまで、頑張つて生きてきた。

一生懸命、働いてきた。

褒美に何か、ひとつだけ・・・お前の望みを叶えてやろう

男は言いました。

”世界で一番・・・可愛い、綺麗な小鳥をください”と。

神様は言いました。

望みは叶えよう・・・ただし、その小鳥…

どんなにお前が愛情を注いでも、いつか飛び立つ運命  
は変えられない。それでもいいのか？

男は、それでもいい…そう言いました。

\*\*\*\*\*



俺はじつと天井を見つめながら、俺にとってのアオイ。。。いつか飛び立ってしまう小鳥の物語を話した。

気がつく。

俺の目から、ほんの少し溢れた涙をぬぐう、柔らかい手のぬくもりを感じた。

「ス キップさん…もういいです。わかりました。だから、今度はちゃんとしてください…」

アオイはそう言って、あお向けの俺の身体に、自分の身体を重ねた…。

時計の針は、イベント当日、午前3時を回っていた。

## 第21章　暫定カレシ

あお向けの俺に身体を重ねたアオイは、愛し合うという行為に対して、積極的だった。

二十歳の娘が。

もちろん、愛し合う　という行為に…本能の赴くまま俺はアオイの身体に、心に、溺れていたが、その中で、冷静な驚きが何度も胸を突いていたのも事実だった。

「私ね。手とか、縛られた方が感じるんです」

「この体位は初めてっ！」

アオイの口から漏れるこれらの言葉。

実際はもつと。。。これ以上は、三文エロ小説より低俗な言葉が溢れ出てくるので、自粛しよう…。

既にホテルの窓から、朝が近い事を知らせる淡い光が差し込みつつあった。

俺とアオイ。

二人は、ベットの中、並んで天井を見つめていた。

「ス キップさんはさあ。人の物だよね。」

二人、愛し合った後、無言で天井を見つめていた。そんな沈黙を破るように、アオイが小さな声で呟いた。

俺は。

俺は、思わず言葉に詰まり

「俺は人の物じゃないよ。誰の物でも無い。  
俺は俺だよ」

そんな言い訳じみた理屈を吐く事が精一杯だった。

「違うよっ！ス キップさんは、奥さんのもんじゃん！」

アオイは、そんな理屈にもならない理屈しか吐かなかった  
俺に苛立つ様に、確信となる言葉を俺の心に突きつけた。

「アオイちゃん…。俺は今の自分に正直に…  
今の俺の心のままに…だから今俺はアオイちゃん  
の隣にいる。。それはわかってくれる？」

「はい…」

「俺は、好きだよ。本当に。でも、俺はアオイちゃんを  
拘束出来ない。拘束したいけど、出来ないんだよ」

「うん。でもね。ス キップさんはアオイのカレシだよ」

「そうだね。俺は、暫定彼氏 かな」

「ス キップさんっ。」 彼氏 ” じゃないよっ ” カレシ ” だよ ” (笑)

アオイは、俺のイントネーションを笑いながら茶化していた。

”暫定カレシ”

この後、幾度となく、キレルアオイは、この言葉を激しく俺にぶつける事になる。

「ス キップさんは、カレシじゃないじゃん！暫定カレシじゃん！」

## 第22章　緊張

不夜の街が、ようやく眠りにつく朝。  
昨晚の喧騒が嘘のような新宿の街を  
俺とアオイは歩いていた。  
もちろん。。。手を繋いで。

アオイのイベント当日。  
それとは別に、池袋にてアイドル関係の大きなイベント  
が開催されていた。

俺達は、殆ど寝ずに朝を迎えたまま、ホテルをチェックアウト  
し、この池袋のイベントへと向かっていた。

今回、我が社のアオイ関連商品を一手に引き受けてくれた  
某社への挨拶と、この会場にて落ちあう予定の  
アオイ商品のデザイナーH氏、そして、  
我が社のサイトを通じて、すっかり、アオイフリークと  
化してしまった、俺の友人、K氏にもこの会場内で  
実物のアオイを紹介する事になっていた。

大切な友人で有るH氏。そして、K氏。  
今、手を繋ぎ歩く俺達の事は、何も知らない。  
そして、何より、彼らに対しての背信に、俺の胸は  
鈍い痛みを伴っていた。

池袋についた俺とアオイ。  
既に手を繋ぐ事は無かった。  
ここからは、お互いにビジネスパートナー。契約者と

披契約者の関係だ。

会場のサンシャインシティが近づくにつれ、アオイはやはり、緊張の度合いを増していった。

つい数時間前の大胆なアオイ。

そして、俺に対し 言葉を浴びせたアオイは、そこになく、少し赤みかがった顔を隠すように俯き歩く。

そう、俺が最初に出逢った アオイ がそこにいた。

「ス キップさん…どうしよう…HさんやKさんが私を見て、サイトのアオイと全然違うつて思われたらどうしよう…。私凄く緊張してます…。何も喋れないかもしれないです」

「大丈夫。HさんもKさんも、きっと、アオイちゃんを可愛いつて思ってくれるよ。」

そう、アオイを励ましながらも、緊張の度合いが強いアオイを見て、俺は思案していた。

「あつ！ス キップさん！プリクラ撮りましょうか」

サンシャインの入り口まで来て、その正面にあるゲームセンターにアオイは俺を誘った。

まるで、これから訪れる数々の緊張から逃れるかのように。

## 第23章 プリクラ

「ス キップさん、私、このゾンビのシューティングゲーム得意ですよ。勝負しましょう、勝負、勝負^^」

俺はアオイに引きずられるように、数年振りゲーセンに入った。

「私、凄く負けず嫌いなんで勝負事は勝つまでやります^^ ス キップさん、今度ボーリングやりましょうねっ。でも、私が負けたら怒りますよ。凄くっ。勝つまでやりますっ」

だろうな。

ここ数ヶ月、アオイとの関係の中で、彼女の性格を把握してきた俺は、アオイの言葉にいちいち納得し、心の中で苦笑いしていた。

アオイは次々に、俺をゲームに引き入れ、尽く俺を打ち負かし満面の笑みを浮かべていた。

俺は、まるで、娘と遊ぶかのような錯覚にとらわれ、その笑顔に、どうしようもない程の愛しさを感じていた。

ゲーセンの一番奥。そこにプリクラコーナーはあった。

プリクラ。

ずっと以前…娘と一緒に撮って以来、俺の年齢では最も縁遠い、二度とこんな場所に来る事はない、そう思っていたこの場所に、俺は足を踏み入れていた。

”カップル、女の子の友達同士以外は立ち入り禁止”

入り口には、そう書かれていた。

たくさんの機種が立ち並び、もちろん、その中は、カップル、そして、女子高生らで溢れていた。

「ス キップさん^^一緒にプリクラ撮ったら、半分ずつ  
しましうね^^」

そう言つて、アオイは俺の手を引いて、テキパキと自分の好みの機種を探した。

アオイの決めた機種で、俺は言われるままに、そこに立ち何枚か写真を撮り、その中で、アオイの気に入った画像をプリクラに仕上げた。

アオイは、手際よく文字や、イラストを入れ、仕上がると半分に切つて俺に手渡す。

「はいっ。ス キップさんの分^^」

笑顔のアオイ。

ただ、この時、俺は時計を見ながら切り出さなければならなかった。

アイドル・アオイ の契約者として。

「アオイちゃん。そろそろ時間が…。  
会場行こうか？」



「はい…」

アオイから笑顔が一瞬のうちに消えた。  
俯き、消え入りそうな声で溜息のような…  
かよわい返事がアオイの口から漏れた。

雑踏の中。俺は今すぐこの場所で

アオイを抱きしめてやりたい。

そんな衝動にかられたが、その感情を押し殺し、  
俺とアオイは、会場へと歩き出した。

## 第24章 二人のアオイ

池袋サンシャインシティ内にある会場。

俺とアオイが入場した時、既に会場内は多くの人で溢れていた。

怯えた表情のアオイ。その手を引くように、俺が目指したブースは、H氏がデザインした商品を実売商品、完成品として仕上げた会社のブースだった。

このA社。実際にアイドルを抱え、数々のイベントを手掛ける我々の業界では、メーカーとしての立場の強い会社だ。

「Aさん。お世話様です。今日は、今回商品化して頂いたうちのアオイを連れて来ました」

そう挨拶し、アオイを紹介したが、やはり、アオイはA氏を直視出来なかった。

そんな、緊張のピークにあるアオイにA氏は追い討ちをかける。

「はい。こんにちは。君がアオイちゃん？あれ？サイトや、商品化した写真と実物・・・随分違うねえ」

アオイの最も恐れていた反応…。

癒し系で売るweb上のアオイ。

実物は派手な顔…今時の女子大生。

アオイと俺の関係を知った後、H氏はいみじくも

「彼女のサイト。完全武装してますよね」

そう言った。

それが、web上のアオイと現実のアオイの真実。

今日これから行なわれるアオイイベントには、web上のアオイしか知らない、そんな人々がやって来る。

Aさんのこの一言は、アオイを緊張から、恐怖へと突き落とした。

「ス キップさん！どうしよう。。。やっぱり私 誰にも会えない！どうしよう…」

そんな中、いよいよ、デザイナーT氏、そして、うちのお客さんの中で最も、アオイに嵌っているK氏と、初顔合わせとなった。

俺は、何とか、アオイにその緊張を超えた恐怖心を取り除いてもらう事に必死だった。

会場を抜け出し、4人で食事。

ただ。。アオイは一切、食事に手を付けなかった。

結果的に4人の食事は成功。

H氏は、賢明にも、場を盛り上げてくれたし、K氏は、現実のアオイを見ても、レストラン内で彼女にサインをねだり、彼女の自尊心を満足させてくれた。

二人との対面を終え、俺とアオイは二人、アオイ自身のイベント会場である秋葉原へと向かった。

「ス キップさんつ。HさんもKさんも、サイトの私と今の私の違い、何も言いませんでした^^  
緊張してたけど、凄く楽しかったです^^

今日来てくれる人達がみんなHさんやKさんのような人達ならいいな」

山手線。池袋から秋葉原までの車中・アオイは、再び訪れる緊張の合い間、少し嬉しそうに、そんな言葉を呟いていた。

俺は、H氏とK氏に心の中で感謝しつつ、本当に…  
そんな人達だけが、今日、来てくれるといいな…  
そう思わずにはいられなかった。

イベント開始2時間前…。

## 第25章　イベント…そして…

午後3時からのイベント。

俺とアオイは、3時に会場となる秋葉原へ到着した。

アオイのPR用ミニポスターや、写真がいくつも貼られたイベント会場。

アオイは、そんな自分の写真に驚き、早速、デジカメにその様を収めていた。

この日発売されるアオイの商品。

イベントには地理的に参加の難しい、熱心なアオイファン達が商品を求め、通信販売の申し込みも多数あった。

そんな人達用に、イベント販促品にサインをする。

イベント開始までの間、店舗を閉め切り、俺とアオイはイベント準備を次々こなしていく。

イベント開始20分前。

アオイの緊張が高まる。

「ス キップさん…最初にHさんとKさんに来て欲しいです。」

一度、池袋で別れた彼らは、イベント開始時には、会場に来てくれる事となっていた。

「わかりました。アオイちゃん。二人に連絡をとって、すぐに来てくれる様、お願いしてみますね」

連絡は取れなかったものの、幸い二人共イベント開始前に会場に到着。

アオイの表情は、いくらか和み、いよいよイベントが始まった。

常連客。。。そして、web上のアオイファン達が訪れ、イベント自体は、何の混乱も無く、順調に進んでいた。

2時間のイベント。

イベントの終わり。それは俺にとって

「アオイと過ごした時間」の終わりを意味していた。

会場を信頼出来るスタッフに預け、

俺とアオイは、東京駅へ向かう。

「ス キップさん^^イベント、緊張したけど、私やって良かったです。これから、変わる気がします。いろんな人と普通に話が出来る様になった気がします」

イベント後の開放感からか、アオイは東京に向かう車中、じょう舌だった。

俺は、そんな嬉しそうなアオイの顔をじっと見つめつつ、イベントの成功を喜びながらも、どうしようもない寂しさに締めつけられていた。

「ス キップさん。手、繋ぎましよう^^

ス キップさん。静かですね。。。何、考えてます？」

「いや何も…ただ、アオイちゃんを見てただけだよ」

俺は、嘘をついた。

「スキップさん！寂しいんでしょ？来月また逢えますよ^^」

アオイは俺の心を見透かすように、少し笑ってそう言った。

そう、来月・・・二回目のイベントが内定していた。

「寂しい…ね…」

何回目かのアオイの問いかけに、俺はとうとう、その締め付けられる心情を露呈した。

「スキップさん^^かわいい^^」

可愛い？

二十歳の娘に可愛いと言われた俺は、そうアオイに感じさせてしま  
う程、

無防備にその表情を晒していたのかと、  
自分自分情けなく感じていた。

と同時に、年齢…立場…それらを忘れてしま  
う程、この時、俺はアオイを愛していた事を実感していた。

新幹線の改札。

ずっと握られていた、その柔らかな手は俺を離れ、

「俺とアオイの時間」が終わった事を、その微かに残ったぬくも  
りが

痛い程、俺に教えていた。

「有難うございました」

アオイは、一度も…ただの一度も振り返らず、その姿を雑踏の中にゆだね、消えていった。

いよいよ、俺とアオイの確執、愛憎劇が始まる明日…。

もちろん、そんな出来事を知らない、この時の俺は、

ただ、ただ寂しさだけを、アオイの残り香に感じていた。



## 第26章　愛　について

イベント翌日のある事件については、次の章に譲るとして。

俺とアオイの遠距離恋愛は、当然メールと電話でそのお互いの想いを確認する日々となっていた。

朝7時。俺は、出勤の為、駅まで歩く10分間で彼女に　おはよう　のメールを送る。

9時。大学に向かうバスの中、彼女は俺に返信をくれた。

その後は、1日に夕方まで2、3往復のメールのやりとり。

そして、夜。

その日、初めて聴くお互いの声…。

深夜…互いに　おやすみ　のメール。

こんな毎日が続けていたが、　曜日と　曜日だけは、電話でのデートを我慢していた。

それは、俺の副業が休みの日。。。すなわち、本業後俺が真直ぐ、家族の待つ自宅に帰る日だった。

或る　曜日。

本業を終え、帰宅途中、携帯がなった。  
アオイからのメール。

「ス　キップさん…今日は電話お休みの日ですけど、

私からするので、今、電話していいですか？」

電話デート。いつも常に電話をかけるのは、俺でアオイから電話が来る事は無い。

決まった時刻に、俺から電話をかける事になっていた。

「え？あつ、はい。じゃあ、俺がかけますよ」

俺は、帰宅途中にある公園のベンチに腰掛け、アオイの携帯に電話をした。

「学校の帰り道、急にス キップさんの声が聴きなくなっちゃった」

甘える事が下手で、強がりばかり言うアオイの珍しい言葉に、俺は驚くとともに、素直に喜びを感じていた。

いつもの様に、俺たちは時間を忘れ、話しつづけた。

「ス キップさん…ス キップさんはアオイとえっちして…他の女の人と…比べたりしますう？身体とか…」

「いいえ…」

「嘘だ！私なら絶対比べる！テクニクとか、いろいろ」

「アオイちゃん。。。俺は比べないです。

その時、真剣に好きだった人とのえっちでしょ？

そんな風に、思った事も、思う事も無いですよ。

俺には、えっち ってそんなに重要な事じゃないですよ。

好きな人と一緒になれた満足感。。。こっちの方が大きいですねえ」

「アオイには、わからないなあ。絶対、私、比べるよ。」  
この人うまい、とか、あつ下手とか」

「じゃあ、アオイちゃん。好きだった人が、その。。。下手だったとして、

嫌いになる？その人の事もう、えっちしたくない？」

「うーん。。。そんな事はないです」

「そうでしょ。それが、誰かを愛するって意味じゃないかな。  
えっちは、人間の自然の欲求だけど、誰かを

愛しいって感じる事は、その行為だけが全てじゃないですよ」

「うーん…わからないかも…でも、勉強になりました」

或る 曜日。公園での出来事…。

## 第27章 アルバイト

大成功のイベント翌日。

そして、アオイと俺、二人の想いが重なった翌日。

いつもの様に、朝のメールから始まり、俺達は、昨日までのぬくもりをまだ僅かに感じつつ、夜の電話デート。。。

「ス キップさん、前に話した事があるMちゃんいるでしょ？  
今ね私、Mちゃんにバイト誘われてるんだ」

「そうなんですか？Mちゃん？ああ…あの30歳の男性  
と付き合ってる友達ですね（苦笑）  
ふーん、アオイちゃん、どんなバイトやるの？」

「あのねえ。お水！キヤバ嬢！」

「ええっ！？ちょ、ちょっと待って！  
何それ！！」

「ス キップさんっ。びつくりした？  
Mちゃんがやろう！って。お金たくさん貰えるしって。」

「アオイちゃん！ちょっと待って！もう決めちゃったの！？」

「ふふふっ・・・まっだです。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ス キップさん、もしかして落ち込んでますう？」

「はは、まだ、決めたわけじゃないし、やるかどうかわかりませんから」

「大丈夫ですよ。その店って完全送迎だから」

ほんの。ほんの24時間前まで俺のすぐ傍にいた アオイ…

人の眼が怖いと言っていたアオイ…

何故………？

たった一日で変貌するアオイに俺は戸惑うばかりだった。

次にアオイが東京にやって来るイベントまでは、まだ、半月以上の時を待たなければならなかったが、

アオイと俺は秘密のデート。。アオイの上京を密かに約束していた。

俺は親友であり、尊敬する某作家先生Aさんをアリバイに利用し、外泊を決行する事になるが、それが一因となり、Aさんから絶縁に近い罪科を受ける事になる…。

アオイのキャバ嬢の件は、イベント翌日の電話以来、話題に上らず、俺自身が忘れていた。

秘密のデート。

アオイ上京の前々日、突然の急展開を見せた。

「ス キップさん！私とMちゃん、来週から店に出ます！  
今日、オーナーさんと食事して決めて来ましたっ」

”電話デート”で突然その事を告げられた俺は絶句した。

「アオイちゃん…」

俺は振り絞るように、彼女の名を呼んだ

しかし。その先の言葉を口にする事は無かった。

これ以上、何を言っても無駄な事は、アオイの性格を知る俺には判りすぎる程判っていたし、アオイがキレル事もまた、判っていた。

「ほらゝス キップさん、また、無口になって！  
落ち込んだじゃった！大丈夫ですよっ！」

アオイはすっかり、興奮状態で、ドレスの話、オーナーの話、電話口でまくし立てていた。

俺は、アオイの…大人でもなく子供でもない…そんな  
未完成の部分も愛しく思っていたが、

大人の世界を知らない…未完成なアオイが、キャバクラで  
アルバイトする事に、どうしようもなく不安…そして  
胸騒ぎを感じていた…。

## 第28章 亀裂

アオイがキャバクラでバイトをする。

この事実には俺は酷くショックを受けていた。

アオイ上京前日。

毎朝、アオイに送る ” おはようメール ” を俺は敢えて送らずにいた。

無言の抗議として…。

その日の昼。

俺の携帯にアオイからメールが送られてきた。

「明日の東京行きですけど、どの新幹線で行けばいいですか」

「あ。。。はい、今日中に調べて、夜、メールしますね」

しばらくして…

「いいです。自分で調べます」

「いや、俺が調べてアオイちゃんにメールしますよ」

そして…

「やっぱり、明日行くの辞めようと思います…」

案の定、アオイは怒っていた。

俺は、仕事を抜け出し、すぐにアオイに電話をかけた。

「アオイちゃん、どうしました？何で？」

「ス キップさん、私の事、呆れてるでしょ？」

いいんですよ。嫌いになったら、いつでもふってください！  
私・・・そういうの慣れてるし」

アオイの怒った時：キレた時の口調：誰も寄せ付けない  
冷たい眼：遠く離れているに関わらず、その眼は俺を  
突き刺していた。

呆れる？

アオイに対して、俺の中にそうした感情は無かった。

これから先、アオイは、俺に対して、この言葉を何度も口にする  
事になるが、俺は一度として、呆れる といった感情は芽生える  
事は無かった。

ただ。。。虚無感：そして、俺という囲いをいとも簡単  
にすり抜けて自由に飛び回るアオイに対して、切なさを  
感じていた。

「アオイちゃん。俺は呆れたりしていません。

まして：嫌いになったりしないです・・・」

「だって！いつも朝くれるメールもくれなかったし、昨日の夜  
突然無口になって、あんまり、しゃべらないし！

無理しなくていいです！嫌いになったら、嫌いって言うて  
ください！」

俺とアオイの数ヶ月。



そして、共にすごした日々。

アオイには、俺の気持ちが伝わっていなかった。  
それが、ただ、それが哀しかった。

俺は、そんな俺自身の受けたダメージを彼女には悟られぬよう、  
そして、俺がいかにアオイを想っているのか、訥々と  
電話口で説明しなければならなかった。

アオイに対する、俺のささやかな抵抗は、こうして俺が白旗を  
あげる事で收拾された。

ささやかな抵抗…

アオイに対して、俺は何度も試みる事になるが、  
それは決まって、この日の初めてのレジスタンス同様に  
尽く”アオイに魅せられてしまった俺”の敗北という  
結果に終わった。

こうして、機嫌を直したアオイは、明日、再び上京。

今、思えば、この上京が、俺にとって最も、彼女と過ごした  
短い時間の中で、一番、楽しい時間だったかもしれない。

## 第29章　再び

「今日は、Ｔさんが下北でオールナイトライブやるから、帰れないと思う」

俺は妻にそう伝えると早朝、家を後にした。

もちろん、向かう先は、下北沢ではなく東京駅。

2週間前。寂しさでいっぱいだった、この場所に俺は帰ってきた。

再び、アオイとの時間を過ごす為に…。

今回のデート。アオイが望んだのは、池袋サンシャインシティ。

「スキップさん、私、ディズニースイーツもいいけど、この間行ったサンシャインにもう一回、行きたいです。私の地元が無い、私の好きなブランドの洋服屋さんがあったんです。」

あとおーナンジャタウンで餃子が食べたいっ。

スキップさん…いいですかぁ？」

俺が常に望んだもの。

それは、アオイの ” 笑顔 ” それだけだった。

それ以外は何も要らない。。。

当然、俺に異論はなく、アオイの行きたいところ、アオイの笑顔がたくさん見られるところに行きましょうと。

二人だけの時間を出来るだけ長く。その想いから、

アオイは、早朝の新幹線で再び上京した。

アオイは前回同様、新幹線の降りる改札がわからず、相変わらずの方向音痴ぶりを発揮し、俺たちの再会是新幹線到着から、10分以上の時を待たねばならなかった。

改札で待つ俺の前に、ようやく姿を現したアオイ。やっぱり、少し俯いて、俺を見ようとはしなかった。

ただ。。。寂しさの中、微かに漂ったアオイの残り香：彼女の香りが、再び、俺の元に戻ってきた。

俺たちは、ごく自然に手を繋ぎ、池袋へと向かう山手線のホームに歩き出していた。

「今日は朝、何個食べてきましたか？」

「うん。。。今日は少ししか食べませんでしたよっだって、餃子いっぱい食べたいから」

アオイの朝食は、大好物のたこやきといつも決まっていた。

日々のメールデート。

「今日は朝から20個も食べちゃったっ」

俺は、そんなアオイのメールを営業の合間に読み、元気なアオイの笑顔を想い浮かべる…それだけで、何も要らない程の幸せを感じていた。

サンシャインに到着した、俺とアオイ。  
予期せぬ誤算が待っていた。

早すぎた。

二人の時間を出来るだけ永く…

それだけを考えていた俺達。

アオイが行きたいといっていたブランド店のシャッターは  
まだ、閉じられたままだった。

アオイと二人、過ごせる時間は、明日の昼まで。

昼からは、俺自身仕事が続いていた。

ましてや、今日アオイとのデートの為、臨時休業して  
しまった俺。

短いようで永い、永いようで短い、この大切な時間。

俺は、何処でも良かった。。。

ただ、そこにアオイがいて…アオイの笑顔があれば、  
それだけで、俺には充分だった。

### 第30章 笑顔

ナンジャタウン。

アオイは、ここで餃子を食べる事を楽しみにしていた。

美味しい　と言われる有名店が、所狭しと軒を並べ  
中でも、評判の良い優良店では、長蛇の列。。。

俺は、そんな人の波を掻き分け、テーブルを確保。

アオイをそこに待たせて、彼女の一番食べたがっていた  
その優良店・・長蛇の列の末尾に立った。

順番を待ちながら、自虐的な笑みに口元が緩んだ。

「ここ数年…家族で出かける事はあっても、俺はこんなに  
必死に　「愛すべき家族」の為に何かする事は無かったな。。。」  
「

並ぶ事、数分。先に食べるように、アオイに告げると

俺は、飲み物を買いに、すぐテーブルを離れた。

アオイはいつも決まって紅茶を好んだ。

人ごみの中、なかなか紅茶が見つからず、俺がテーブルに  
戻ったのは、すっかり、餃子も冷めてしまっているであろう  
そんな時間が経過した後だった。

遅くなってごめん！紅茶がなかなか見つからなかった

そう言いながら、俺はアオイに紅茶を差し出した。

テーブルには、10分程前、俺が置いた餃子が、そのまま

置かれていた。

「なんで？先食べてていいっていったでしょ。すっかり、冷めちゃったよ」

「だって…一緒に食べた方が美味しいからっ」

アオイは、真剣な眼差しで俺をしっかりと見つめて言った。

「美味しい〜！ヤバアイ〜信じられない〜」

一緒に箸をつけた餃子。アオイは、こんな言葉を連発し満面の笑みを浮かべ、何度も”俺が一番見たかった”その笑顔を俺にくれた。

俺は箸をおいてその笑顔を一時も逃すまいと、アオイを見つめていた。

「ス キップさん。何考えてます？餃子美味しいですよっ食べないんですかあ〜？」

「あ…アオイちゃん…食べられるんなら、俺の分もどうぞっ」

「ス キップさんは、私が何か訊いても、いつもうなづくだけでわかんない」

うなづくだけ。。。そう俺は アオイとの楽しい時間を過ごしながら、いつも俺の心のつじつまを合わせていた。

いいのか？これでいいのか？  
いや。。。いいんだ。。。これでいい。

ナンジャタウンのアトラクションも満喫した俺達は、朝、まだシャッターの降りていた、アオイお目当ての店に向かう事にした。  
年内有効のナンジャタウン招待券を貰った俺達。

「また、二人できましようねっ」

アオイは、やっぱり、俺の見たかったとびきりの笑顔で  
そう言った。

その後。

アオイと俺。ナンジャタウンに来る事は二度と  
なかった。

### 第31章　再び新宿へ

アオイの買ったかった洋服、見たかった洋服。

アオイは精力的に、サンシャイン内、次々と店をまわった。

俺はついていくのみ（笑）

「スキップさん。これ、私に似合うかな？」

「スキップさん。この色とこの色、どっちがいいかな？」

アオイは、店に入り、その度、俺に意見を求めた。

俺は正直服なんてどうでも良かったのかも  
しれない。

ただ、嬉しそうに洋服を選ぶアオイだけを見ていた。

「ああ…アオイちゃんは、どんな服でも似合うから」

俺は、そんなとって付けたようなナマ返事を返すだけ。

「あゝあゝスキップさんてうちのお父さんと一緒じゃん。

”アオイは可愛いね。どんな服も似合うね”

お父さんもこればっかつ！」

そんな中アオイは二つの店舗で、どちらを買うか  
決め兼ねていた。

当然俺は言う。

「おっけっ。こっちは、俺がプレゼントしましょ。だから、もう



一つのお気に入りはアオイちゃんが買ったらいいよ」

アオイが止めるのも無視して、俺は、そのアオイの悩んでいた一方の服を強引に買った。

もちろん高価な方を。

ごめんなさい。。。ありがとうございます。

そう言いながら、アオイは20歳の女の子らしい笑顔を俺に隠す事は無かった。

俺はそれだけで、本当にそれだけで幸せを感じた。

「私。お水のバイト、始めるでしょ？お給料貰ったら、今度は私がス キップさんに何か買ってあげるねっ」

「いや、アオイちゃん、俺は何も要らないから」

アオイは無邪気に笑いながら、そんな言葉を口走ったけれど、俺の胸中は複雑な想いでいっぱいだった。

俺とアオイは、池袋を後にすると、新宿へと向かった。

既に、陽は傾き、新宿はこの日も何ら変わる事なく

”俺の好きな街”に変わりつつあった。

この日。

俺とアオイが共にする二度目の夜。

アオイは前回と違って、より積極的で、二人が朝を向かえる場所…この日、二人が一夜を明かす場所探しに、驚く程、

こだった。

「ス キップさん。ラブホテル。私、楽しみなんだあ。私、妥協しませんよつ。絶対に、私が気に入ったラブホに泊まりますよつ。」

あゝラブホなんてえゝ16歳以来だなあゝ楽しみです。それに私、休憩ばっかで、泊まった事ないですつ。楽しみです」

俺は苦笑いするしか無かった。

アオイと二人だけの時間を過ごす事。これは、俺にとっても嬉しい事ではあるけれど。

何処か遠くで清纯派アイドル・アオイ とのギャップ、サイト上でのアオイと別人のアオイに寂しさと戸惑いを感じずにはいられなかった。

陽も落ちた、歌舞伎町。

俺達は、前回と同様に、居酒屋に入った。

### 第32章　伏線

歌舞伎町が、やっと歌舞伎町らしくなりつつある時間。

俺とアオイは居酒屋へ。

「アオイちゃん。一人暮らしでちゃんと野菜採ってますか？好きな肉類ばかり食べてちゃ駄目ですよ」

若さなのか（苦笑）こうして、居酒屋に入っても、アオイのオーダーするものは、もっぱら肉類・・・。

俺はまるで、離れて暮らしている娘と再会したかのように、その食生活さえ、気になる程アオイにのめり込んでいたのかもしれない。。。

「ス キップさん。ほら！私の仲良しのMちゃん。今度一緒にお水〱のバイトやる娘だけど、30歳のカレシに振られちゃったんだあ。それでね。Mちゃん、凄いショック受けちゃって今ね出会い系で初めて逢う男の人とホテルとか行っちゃってるんだあ。」

私、そんな事辞めなっ！って言ってるんだけど。  
なんかね…死にたくなる程寂しいんだって。  
判るな。。。私。。。」

俺は正直この、アオイの親友Mちゃんに対しては決して良い感情を持っていなかった。

何故なら、いろいろな意味で、アオイは彼女の経験する自分より少し背伸びした大人の世界に、安易に影響を受けていると感じていたから。

そして、このキャバクラのバイトに続いてMちゃんの存在は、俺とアオイの決定的な亀裂を演出する事になる…。

「ス キップさん。あとね。

例の元カレなんだけど…もう一度会いたいって、何度も電話来るんだ。

何だかだんだん可哀想になってきちゃって…。

一回だけ逢ってもいいかな…なんて今、考えてるんだけど

ス キップさん…私どうしたらいいですか？」

「アオイちゃん。アオイちゃんは、前にも訊いたけど、ほんの少しでもカレに愛情はある？」

「無い…です。」

アオイが俺に望んだ答。少なくとも、この時の俺はアオイの言葉を信じていた。

「アオイちゃん。じゃあ俺の正直な気持を話すよ。

元カレとは、逢わないで欲しい。

それが、今の俺の気持・・・」

アオイは、につこり笑って言った。

「うれしいです。元カレには逢いませんっ。

フッフ 何か愛されてる！って感じっ！うれしいです」

これが、この時のアオイの”本当の気持”だったのか。今となっては判らない…。

ただ…この元カレの執拗なアオイへのアプローチは、俺とアオイの、このアオイ日記のエピソードを意味する。。。そんな”伏線”と成り得た事を俺も、そして、たぶんアオイ自身も気づいていなかった。

### 第33章　ラブホテル

ほろ酔い気分のアオイを連れ、居酒屋を出た俺達は、歌舞伎町入り口付近のコンビニに入った。

俺は酒。アオイは食料やら、泊まる為の備品を買い込んだ。

いざっ！アオイ曰く妥協の無いラブホ探し…。

「私もメツチャ楽しみにしてたんですよ。絶対にいいラブホ探しますっ。ねえ！ス キップさん！」

俺は笑いながら、うなづくしか無かった。

新宿のラブホテル街。

俺は、つないだ手を引っ張られるように、無数のラブホテルを覗く事になった。

「アオイちゃん。ほら、これなんかどう？この部屋いいんじゃない？」

「ダメですっ。なんか、この部屋・壁が気にいらんですっ」

「じゃ、こっちは？広そうだし」

「ダメですっ。はい、ス キップさん、次のホテル行きましょう」

こうして、妥協の無いアオイに引きづられ、俺達はいつしか新宿を抜け出し、新大久保へ。

どれ位歩いただろう。。

結局、俺とアオイは再び、新宿のラブホ街へと戻ってきていた。

「ス キップさぁんゝ足、皮がむけちゃった！痛い！」

見ると、ヒールに擦れ、マメが出来、つぶれていた。

そりゃ…そうだろ…これだけ歩けば。

俺はそう思いつつ、彼女に肩を貸し、何とかホテル街入り口にある交番の前まで連れてきた。

「アオイちゃん。今、コンビニでバンドエイド買ってくるから、ここにいてね」

俺は急ぎ、バンドエイドを調達し、交番の前アオイの足にその処置をしていた。

「ス キップさぁんゝもう、妥協しますうゝあの3番目に見たホテルでいいですう、あゝ疲れたあゝ」

ようやく、本当によやく妥協した（苦笑）アオイを連れ一時間程前に来た、同じラブホテルへ入った。

「うわっ、この部屋結構いいですゝヤバアイ」

俺は苦笑するしか無かった。

こうして。

俺とアオイ。二人だけの永いようで、短い二度目の夜が始まるうとしていた。

### 第34章 夜話

俺達の夜”は前回の時ような何処かギクシャクした  
それでいて、お互いの想いを探るような…もうそんな事は  
無かった。

二人だけの空間。

その中で、俺とアオイは、カラオケを唄い、酒を呑み、たくさんの  
会話を楽しんだ。

ホテルにチェックインしたのは、まだ、歌舞伎町という街に日の昇  
るような時間帯で、

決して永いとは感じないが、本当の朝を迎える時間には、  
充分過ぎる 時 が二人にはあった。

シャワーを浴び、俺とアオイは二人並んでベットに横たわりながら  
二人の時間を楽しんだ。

会話が途絶えれば…キスをして…また、たくさんの話をした。

「ス キップさん。来週から私、バイトでしょ？」

電話デートの時間減っちゃうね」

アオイのキャバクラでのバイトは、週2〜3回。  
木、金。そして、場合によっては土曜日も。

曜と 曜は、俺の仕事が定休。すなわち、本業後は  
自宅に直帰する日。電話デートもまた、定休と決まっていた。



曜日と 曜日。来週から、確実にアオイの声を聴ける日は、この二日間だけになる。

「うん。そうだね。。」

「ス キップさん。哀しい？寂しい？」

そう言っつて、アオイは、あお向けの俺の身体をまたぐようにして俺の顔をじつと真剣に見つめた。

「そりゃ哀しいし寂しい。。。」

俺は、もうこの時、アオイの前で感情を殺す事は無駄だと気づいていた。

そして、この娘の前では、素直な自分でありたいと強く思っていた。

アオイは、俺のそんな言葉を聞くと、ニツコリと笑ってあお向けの俺の身体に、自らの身体と唇を重ねた。

”最初の夜”と同じ様に、アオイはセックスに対して、貪欲で有り、積極的だった。

俺は、やはり何処か。。。心の歪を感じつつも、その心も身体も本能のまま、愛した。

「ス キップさん。。。何か私達一つになっただって感じうれしいな」

アオイは、俺に抱かれている最中に、何度もこんな言葉を投げかけ

た。

・・・。

セックスをして、一つになる。

愛する二人の自然の欲求で、それは確かにそうだけれど。

精神的に一つになる…そんな意味合いにおいて、俺は、アオイを  
抱きつつも、何処か、心もとない違和感を感じていた。

### 第35章 最後の朝

真夜中…。

アオイはベットの巾、布団に包まり、ラブホテルお決まりの如何わしきビデオを食い入るように見ていた。

「ス キップさんっ。うわっ！スゴっ！信じられな〜いいあの体位っ笑えるう〜 Mちゃんに教えてあげよ〜」

アオイは ケタケタと声をあげ、少し前まで自らもここで俺と同じ様に行われた 行為 を興味深そうに見ていた。

俺の見てきた たくさんのアオイ。

このアオイもまた、紛れもなくアオイなんだな。。。

そんな事を感じながら、エロビデオを夢中で見るアオイを俺は黙って見つめていた。

「アオイちゃん。約束してくれる？」

来週からのバイト。家についたら、必ず俺に ただいま のメールをください」

「え？だって私たぶん帰るの午前3時とかですよ。いいの？」

「いいです。ちゃんと、お帰りのメール返すから。だから、ちゃんと帰ったら、メールくださいね。これ約束ね」

「うん。判りました。必ずメールしますね。  
スキップさんっ心配症だなあ」

永い夜。それでいて短い夜。

俺達はその、流れていく時に抵抗するかのよう、何度も愛し合った。

明け方…。

アオイは小さな寝息とともに眠りについていた。

俺は眠る事はしなかった。

ただ、横に眠るアオイの寝顔をいつまでも見ていた…いや、見ていたかった。

静かに眠るアオイの髪。。。頬をなでながら、俺にとってアオイがくれた幸せな一日を噛み締めるよう、思い出していた。

これがアオイと向かえる 最後の朝 だとも知らず…。

### 第36章　溢れる感情

気がつく。。。

既に　朝　と呼ぶには遅い時間。。俺は知らぬ間に眠って  
いたらしい。

アオイは備え付けのカップに紅茶をいれていた。

「ス　キップさんも飲みますか？」

俺達は、ベットに寄りかかるように並んで座り、アオイの  
いれた紅茶を手にした。

「あああゝ」

アオイは溜息をついた。

何処か寂しげで昨日再会した時の、これから過ごす二人  
だけの永い時間がもうすぐ終ろうとしている…  
俺には痛い程わかるそんな溜息だった。

無言で紅茶を飲む、俺とアオイ。

俺はじつと、アオイを見つめていた。

アオイは、そんな俺を、やはり見つめていた。

優しいキスをした…。

今日という日。その後はまた、しばらく会う事は出来ない。  
俺達は時間の許す限り飽くこと無くお互いを愛した。

結局。二人シャワーを浴び、時間とにらめっこをしながら  
チェックアウトぎりぎり1分前！

俺達はホテルを後にした。

ラブホの外へ出た途端、二人で大笑いした。

「あゝス キップさんっ。私、髪の毛、全然乾いてないじゃん  
もっと真剣にドライヤーあててくれないと駄目じゃん」

そう、チェックアウトまでの数分。

俺が彼女の髪を乾かし、荷物の用意をし、アオイをせかし  
続けた。

そして二人。お昼前、ラブホテルの前で大笑い。

俺にとって、こんな風にお互い笑いあえた事は、これが最初で  
最後だったような気がする。

俺達は、ゆつくりと新宿駅へと歩き始めていた。

「アオイちゃん。新幹線の時間まで、3時間はあるから、  
食事しましょう」

俺達は、アルタ付近の洋食屋で、少し早い昼食をとる事にした。

アオイは紅茶。俺はビール。

「ス キップさぁん。ホントに！お酒好きですよねぇ」  
身体に気をつけてくださいよ。」

何度も一緒にした食事。

俺はアオイと同じものはオーダーした事が無かった。  
何故なら・・・アオイは必ず

「あつ、ス キップさんの美味しそうですね。ふふっ」

「はい。どうぞ」

いつもこうなつたし、そして、美味しそうに食べるアオイを見る事：俺はそれが好きだったから。

食事が終る頃。

アオイは自分の財布から千円だけ取り出し、はいっ！  
そう言つて、俺に差し出した。

アオイとの関係が始まってから今まで、彼女には全く財布を開かせる事が無かった。

新幹線、都内の移動、ショッピング、食事、  
そしてホテル代。

この昼食。

もちろん、アオイの分だけでも千円じゃ足りない。  
アオイも当然判つた上での・・・千円。  
俺は黙つて受け取つた。

この二十歳の娘が、俺の心の全てを支配している  
事を痛切に感じていた。

時間を忘れ愛したアオイ。

なれど、止め処なく溢れる 愛しいという感情を  
抑える事は出来なかった。



### 第37章 アオイの哀しみ

東京駅。

俺とアオイは、構内にあるファーストフード店、カウンターに並んで腰かけていた。

そう新幹線の発車時刻まで、あと十数分。

俺は前回同様、アオイとの 別れ がどうしようも無く、寂しく、その想いは、俺の心を突き破り、身体中に鈍い痛みを覚えていた。

俺とアオイ。

無言のまま、紅茶を口に運ぶ。

俺はアオイを直視出来なかった。

しばらく、彼女と会う事が出来ない。。。今、手を伸ばせば容易に感ずる事の出来るアオイ。。。それが、数分のちにはとても、遠く…安易に手の届かない処へと去ってしまう。

そう思うだけで、俺の心から哀しさ、寂しさ、そんな感情が溢れてしまいそうだった。

それでも。何度か、俺はアオイを見ずにはおれなかった。しっかりと、今のアオイを瞼の底に、心に焼き付けておきたかったから。

俺がアオイを見つめる。

アオイも俺を見つめていた。

俺はただ笑って頷く…。

「ス キップさん。元氣無いですねえ。また、頷いてる…  
何考えてますか？」

そう言ったアオイも、俺の勘違い等では無く、やはり元氣は無く  
哀しげな瞳で俺を見つめていた。

「うん。アオイちゃん、やっぱり、俺はさび…」

こう、言いかけた俺の言葉を遮るように、アオイは少し、  
ほんの少しだけ、怒った口調で言った。

「寂しい…気持ちを言葉に出したら駄目。言葉にしたら、  
本当に 寂しくなっちゃうんですよ。」

だからそう思っても絶対、口に出したらいけないんです」

「判ってる。でもさ。俺は今の感情を、素直にアオイちゃんに  
伝えたい。。。」

新幹線の発車時刻は迫っていた。

俺とアオイは、飲みかけの紅茶を置いて、新幹線の改札へと  
歩き出していた。

繋ぐ手のぬくもりが、前回の別れ以上に、俺の心を激しくなぶって  
いた。

アオイを見ると。。。。

彼女は、哀しいような、でも、どこか怒ったような顔をしていた。

「アオイちゃん。アオイちゃんは、改札で別れた後、一度も振り返ってくれないよね？いつも…」

アオイはしばし無言で歩き続けた。

新幹線の改札が見えてきた頃。

「ス キップさん！私が哀しく無いと、寂しくないと思っているんですか！？」

ス キップさんは、私と別れた後、仕事に行って大勢の仲間に出まれて、家に帰ったら、奥さんや お子さんに囲まれて…。

私は…私は、新幹線に一人で乗って、バスに一人で乗って、ただいま って、一人のアパートに帰って…。

私、お別れの時は、絶対に振り返りません。いつだって。振り返ったら！やっぱり…凄く…寂しい…」

俺は何も言えなかった。

そして、新幹線乗り場の雑踏の中、涙が溢れそうになる自分を必死で抑制していた。

自分だけが、この 別れ という鈍い痛みと戦っているかのような錯覚。。。俺の痛みを取り除く事だけを考えていた思慮の無さ。。。情けなかった…。

「有難うございました。二日間、凄く楽しかった。」

アオイは、さっきまでの、哀しい、そして、何処か怒り…

そんな表情を消し去り、最高の笑顔を創り出し、俺を真直ぐ見つめ

て

こう 言つと、改札をぬけていった。

もちろん。一度も振り返らず、小柄なアオイの姿は  
すぐに、俺の視界から 消えていった。

### 第38章　歪み

アオイとの再会。二人だけの濃厚な時間は瞬く間に過ぎ去り、俺とアオイは、違う環境の中で、新しい形を作らなければならなかった。

いよいよ、アオイのキャバクラでのバイトが始まる。

アオイは彼女を誘った、アオイの言うところの親友Mちゃんとのこのバイト…張り切っていたし、妙にはしゃいでいた。

ただ俺はやはり、その日が近づくこと不安は増していった。

木曜日。夕方。

「いつてきます」

アオイからのメール。

いつもならこれから、俺とアオイの”電話”デートの始まる時間だ。

「バイト終わって、家に帰ったら、約束どおりメールしますね」

こうして。

明け方の「ただいま」メールが、日課となっていくが、二つの仕事を持ち、365日公休皆無、朝7時には出勤する俺の中に、疲労は蓄積していった。

アオイもまた、全く知らなかった　大人の世界を覗く…  
そして、慢性の寝不足…疲れ…。

日曜日は、お昼を過ぎて電話しても、眠っている事が多くなった。  
折角の、限られた時間の電話デート。

寝ているのか…起きているのか…何を話しても  
アオイの反応は鈍かった。

知らず知らずお互いのリズムがずれていく。

掛け違えてしまったボタンに気づかず、アオイと俺は、  
こつした日々に流されていった。

そして、いつしかアオイは激しい感情を俺にぶつける様  
になっていった。

### 第39章　失ったもの

本来のアオイ日記本道から、少し前後するけれど…

\*\*\*\*\*

アオイと俺の関係が続く事によって、俺が失ってしまったもの。

その中の一つに信頼を築いてきた友人関係があった。

作家兼国民的ゲームのシナリオライターC氏。

Cさんは俺より、少し年上だが、初めて一緒に酒を呑んで

以来、お互いウマが合ったのか親友と呼んでもおかしくない関係を築いてきた。

俺がアオイと初めて関係をもった前回の上京直後：

俺はCさんと、いつもの如く杯を交わしていた。

突然、何の前触れもなく、Cさんが言った。

「スキップさん。君んところで売り出した娘さ。

アオイちゃんだっけか？彼女とやっちゃったろっ。」

…絶句。

作家の勘は鋭い。俺は観念し、Cさんに事のいきさつを正直に話した。

その場では、「ほどほどにしろよっ。」と笑って話していたCさんだったが。

俺がアオイと契約を結んだ時から、Ｃさんには、こうなる事が判っていたらしい。

その後、彼が と或るライブを決行する事になり、俺は彼のライブを

利用し、アオイを東京に呼んだ。

家族には、Ｃさんのオールナイトライブに行く。そう言って。

Ｃさんには、事前にメールで断りを入れたが、彼からの返事は無いまま俺とアオイは再び夜を共にしていた。

その頃から。Ｃさんは俺に距離をおいていた筈だった。だった？

それは、俺自身、アオイに夢中で、それさえ感じる事が出来なかったんだろう。

そんなＣさんの俺に対する態度に気付いたのは、皮肉にもアオイとの決別を決めた、そんな日だった。

彼の運営する人気サイトから、俺のサイトリンクが切られていた。

（このアオイ日記では、まだ先の話になるけれど）

アオイとの決別をＣさんに伝えるとすぐにメールが帰ってきた。

「今晚呑みたいなら、付き合うぞ」

そこで、初めて、Ｃさんの思いを俺は聞く事になった。

「ス キップさん。俺さ。あんたの新しい事業、旗揚げからずっと、協力してきたでしょ。」

でもさ。アオイちゃんのイベントには、俺、一度も顔出さなかった。



たし、お付き合い　でも、アオイ商品、一度も買ってないよ。

だってさ。俺は、ス　キップさんがアオイちゃんと、こうなりたい為に、キャンギャルにして、商品作っただけかと思えなかったもん。

それにさ。君のお手つきの娘の商品をさ。あんたは彼女のファン達に、清纯アイドル・アオイの商品として、売りつけてるんだぜしかも、その商品を手伝いに来てる、あんたの奥さんに売らしてるんだぜ。

俺はス　キップさんの事、好きだけど、これだけは許せないと思っ  
たし、こんな不純な商品は絶対買わないと思っただよ」

俺がアオイとの関係を持ちたいが為に、彼女と契約した：

この点だけは、Cさんの思い込みだが、それ以外の事は全て  
が正論だった。

ただ。。。アオイに対する愛情は、理屈や正論で封じ込める事が  
出来る：そんな易しい感情では無かった。

これ以後、Cさんと俺の関係は以前の様に戻った。

でも、あの頃のように時を忘れ、とことん飲み明かすような事は  
無くなった。

## 第40章　疲労

ふと目を覚ますと、午前2時。  
知らず知らず座椅子で眠っていたようだ。。。

まだ…2時か…。

そう。アオイがキャバクラのバイトから開放される時間は3時。  
あと一時間。

俺は溜息について、すっかり、家族の寝静まった家の中、  
一人、その時を待つ。

「ス キップさん。今終わりました〜これから帰ります」

そして。

「ス キップさん。今帰りました〜」

「アオイちゃん。お帰り〜。じゃあ安心して寝る事にします  
おやすみ。」

週に2度から3度、こんな真夜中の携帯メールが、俺とアオイ  
の日常へと変化していった。

6時には起床する俺。二つの仕事をこなし休日と呼べる日の無い  
生活は、少しずつ、俺を疲労させていく。

感情の起伏も激しくなり、自分をコントロール出来なくなっ  
てきたのも、丁度この時期だった。

副業での友人の甘えからくるツケの滞納等、悩みを抱えていた時

、アオイ商品プロジェクトの一人、デザイナー氏から貰った励ましのメールを電車内で読み、涙が止まらなかった事もあった。

アオイもまた…。

慢性の寝不足。初めて接する夜の大人の世界に、感情を高ぶらせていた。

或る日は…

「ス キップさん、私って嫌な女だよ。自分勝手だし、思いやりないし、可愛くないし嫌になる…」

「アオイちゃん、そんな事ないよ。アオイちゃんは優しいいい娘じゃない。俺は知ってるよ」

「私がいい娘？知ってる？いい加減な事言わないで！ス キップさん

私の事なんて、何も知らないじゃん！」

そして、或る日は…

「もうさあ、ス キップさんとは終わりにしようかな…」

「え？何で！？どうしたの、アオイちゃん！」

「私って悪魔じゃん！」

「どうして！アオイちゃんは、悪魔じゃないよっ。俺にとっては天使なんだよ」

「スキップさんにとってはそうかもしれないけど、スキップさんの家族や、友達にしたら私は悪魔じゃん！スキップさんの生活とか壊してる悪魔じゃん！私！私！最悪じゃん！」

「アオイちゃん…」

アオイとの会話が週2度に限定され、それさえも、お互い疲れた中での会話。。。アオイは電話で話す度、自分の高ぶる感情を俺にぶつける事が多くなっていた。

それでも。

それでも俺は、アオイとの日々が、いつまでも続く事を願っていた…。

## 第41章　別れの予感

お互いの意思が、うまく伝わらない日々。  
そんな毎日が続いた或る日。

いつも交わす、おはようメールが酷く俺を動揺させた。

「ス キップさん。

私、このバイト始めて、気づきました。

既婚の男の人って、奥さんがいても、頭の中は えっちの  
事しか考えてないんですね。

うちに来る既婚の人って、”アオイちゃん、やろっよ、  
やろっよ” ってそればっか。

はあ…なんか、もう、やんなっちゃった」

これは、アオイが俺に対して思った事なのか…。

「ちょっと待つて。それは俺も含めて、アオイちゃんが  
思っている事？だとしたら、俺は哀しい。

俺のアオイちゃんへの想いは理解してくれてる？」

「もちろん。ス キップさんは好きだけど。。。でも  
やっぱり、既婚の男の人は皆一緒かなって。」

俺は、慌てて、彼女が大学の授業中だというのに、すぐに  
電話をかけた。

俺の彼女への想いを、訥々と話さなければならなかった。

結局。アオイは寂しかった。不安だった。

「遠距離恋愛は慣れてるはずだけど…辛いです」

初めてアオイは、そんな言葉を俺にぶつけた。

好きだ…愛している…確実な言葉をアオイは常に欲していた事にこの時、俺は気づいた。

常に 寂しさ をアオイには伝えていたけれど、俺同様、いや、俺以上に いつも 寂しさ を感じていたのはアオイだったのかもしれない。

ただ。。。その事に気づいたところで、アオイの住む遠い街に今すぐ、かけつけるわけにはいかなかったし、じゃあ、いつ行くから

そんな約束すら、俺には出来なかった。

寂しさ は、確実にアオイの心を支配していく。  
その結果。初めて俺は、アオイとの別れを意識する事になった。

アオイの再上京。次のイベントまで1週間に迫った、そんな時、事件は起こった。。。

## 第42章　羽音

この日は久々にゆつくりと、アオイと電話デートが出来る日。  
…のはずだった。

アオイが掲載された、某アイドル雑誌が発売される日。

一冊、¥2000近くするカラーをふんだんに使ったこの雑誌。  
本文中にも、アオイの商品は紹介され、うちの店舗の宣伝効果は  
倍増した。

アオイはご機嫌だった。

いつも、ギクシヤクしていた、このところの二人の会話も  
この日は、広告の話、いよいよ迫ったイベントの話、商品の話。  
楽しい時間だった…が。

「ス キップさん。今日ね。Mちゃんいるでしょ？一緒にオミズ  
やってる。Mちゃんがようやく年上の元彼の事、吹っ切って  
男の子と会っらしいんだ。」

それで・・・1対1じゃ嫌なんで、私にも来てって。  
これから、2対2で会う事になっちゃった。ごめんね」

「ええ？これから？うーん…」

「フフ、大丈夫！付き合いで行くだけだから。ス キップさん  
落ち込んだ？何か、急に暗くなったよ。すぐ帰るから  
平気。帰ったらメールするから。」

こうして、アオイは夜7時半、俺との電話デートを切り上げ

行つてきまーす

屈託の無い、明るい声で出掛けて行つた。

胸騒ぎ。。。不安。。。

残された俺は、夜の店舗で独り。

大切な小鳥が飛び立つ

羽音を微かにきいた気がしていた。。。

夜。 10時…11時…12時…。

アオイからのメールは無かった。

12時半…。

「アオイちゃん。今どこ？まだMちゃん達と一緒に？」

俺はついに、不安に負けて、彼女へメールを送信した。

しばらくして。

「ス キップさんつ。ごめんなさーい。何だか盛り上がっちゃって  
今から帰るところですつ。楽しかったあ」

メールの文字に、アオイの興奮が伝わる、楽しさが伝わる。。。それは益々、俺を不安させた。

アオイという俺だけの小鳥。

微かにきこえた羽音は、確かなそれとして、俺の心に哀しく響いた。

俺たちの関係が崩壊していく…カウントダウンが始まった



そんな夜の出来事だった。



俺は酷く動揺し、こんなメールを送るとすぐに電話をかけた。

「だつてえ。。。ス キップさんの事は好きだけど、いつも会えるわけじゃないしい、人のものだし…」

この後、まだまだ続くアオイとの 愛という名の確執の中で俺は少しづつ気づき始める。

俺自身は妻帯者。次々に 恋し、愛される適齢期は終えていた。アオイは、まだ二十歳。

これからも、たくさんの出会いがあり、たくさんの別れを経験して大人の女性へと変貌していくんだろう。

俺は？

アオイと出会い、彼女を愛してしまった時、全てがそこで止まっていた。

### 最後の恋。

俺の中では、いつのまにか、このアオイへの想いが一途なまでに、そんな言葉に括られていた。

ただ、この時は。。。そんなアオイと俺の年齢の違いや立場の違いからくる 愛の重さ の違いは理解出来なかった。

たった数時間遊んだ男と俺。

俺のアオイへの愛情は、彼女の中で、そんなに脆く、壊れやすいものだったのか？

「アオイちゃん…。」

俺は、何も言う事が出来なかった。  
言葉が見つからなかった。

「Mちゃんはね。二股で付き合えばいいじゃんって…。  
でも、私はそんな事出来ないし。少し考えていいですか？」

久しぶりに楽しい会話が弾んだ昨晚。

友達の付き添い…心配無いですよ…行ってきまゝす…

この時の俺には、もう忘れてしまっぐらい遠い昔の  
出来事のように思えてならなかった。

俺は…哀しい決断を迫られていた。

## 第44章 さよなら

迷っている…。

そう、アオイが俺に告げた時点で、俺は悲しい決断を下さなければならなかった。

このまま、俺との関係が続けても、未来は何もない。。。それならば、同年代の恋人を見つけた方がいいに決まっている。

俺の理性は 俺自身 にそう呼びかけていた。

でも…。

この数ヶ月、アオイは俺の全てだった。  
24時間、アオイが俺を支配していた。

Mちゃん  
の存在。  
時には

その人、奥さんから取っちゃいなよ

そう言つて、アオイをけしかけ、キャバクラのバイトにアオイを誘い、そして今度は、フタマタの薦め。

まさにマッチポンプ。俺は写真でしか見た事が無い彼女を恨めしく思った。

この日もキャバクラのバイトが入っていたアオイとは、夕方、ほんの少しだけこちない会話を交わした。

「ス キップさん…私、わからないよ」

「アオイちゃん。アオイちゃんが迷ってる。そう言った時点で、俺の気持ちは・・・覚悟は出来たから」

+++++

アオイと夜を共した時、俺たちはこんな話をしていた。

「アオイちゃん。俺はこれまで生きてきて、女性を一回もフツた事がないんだよ。だから、別れたりする時はいつも俺が振られるわけ^^  
だから。。。いつか、アオイちゃんと俺が さよなら する時は、アオイちゃんが俺を嫌いになった時。  
それ以外の別れ方は無いから」

+++++

アオイという俺の愛した小鳥が、今まさに俺の手元を離れ飛び立とうとしていた。

「でも私。別にス キップさんを嫌いになったわけじゃないんです。だから、迷ってるんです」

「アオイちゃん…それなら・・・駄目だったら…  
また、戻っておいで。」

「えーっ！いいんですかあゝ！」

俺の苦渋に満ちた提案。

振り絞る俺の声とは対照的に  
アオイのその声は、歓喜の声　そのものだった。

「俺はさ、ずっと　同じ場所　にいるから。」

そうアオイに告げながら、俺は心の中で

さよなら。

そう繰り返し、呟いていた。

## 第45章　別れの朝

人は想像を絶する衝撃を受けると

人としての全ての機能が停止すると知った。

感情が凍るのでは無く、そのものが無くなると知った。

\*\*\*\*\*

アオイに苦渋の提案をした翌日。

俺はいつも決まった時間での　おはよう　メールは送らずにいた。

別離のメール…。

送ろう…そう決めていたのに。

営業途中、9時をまわった頃に俺はようやく、既に打ち込み済みの、そのメールを送信した。

「アオイちゃん。今まで有り難う。

俺の願いは一つ、これからの人生、笑顔で幸せな日々を過ごして欲しい。

これからは、お互いビジネス。二人でより良い商品を創っていきましょうね。」

確か。。。こんなメールを送信したと思う。

それから数分…。

アオイからの返信には、信じられない出来事が書かれていた。

「ス　キップさん…。もう、彼との事は無くなりました。」



彼は最低です！でも私も最低です…。

私…一睡もしてません。今日、学校も行けません」

アオイに 男と女 としての最後のメールを送り、意気消沈  
ぼんやりと歩いていた俺に届いた彼女からのメール。

?????。

俺は 別れ を決意したばかりのアオイへとすぐに電話していた。

「アオイちゃん。どうしたの？何があつた？」

その問いに答えたアオイの言葉は  
俺の想像を絶する、理解を超えた、信じられない言葉が  
次々と俺をなぶり続けた。

俺の思考は一時停止し、壊れた。  
そして。

その機能は無感情になる事で、俺の理性を守っていた。

衝撃！まさに。

アオイは怒ったような口調で、それでいて半分泣きじゃくり  
ながら、暫定カレシ である俺に残酷な告白と自分への懺悔を  
まくし立てていた。

## 第46章　思考停止

「あのね。昨日、私とMちゃんがバイトしてる店に、Mちゃんのカレシ、私に告った彼、もう一人、二人の先輩っていう人が遊びに来て…。」

Mちゃんの彼はMちゃんを指名して、私に告った彼は私を指名したんだけど…。彼ね。全然、私と話しないで、他の女の子とばかり仲良くして…。

私に前日、付き合ってくれ！って言うといて…。私だんだん、むかついちゃって。

お店が終ってから、私とMちゃん。男性三人で話したんだけど先輩って人が、凄く怒って。

お前！アオイちゃんに告って、付き合うつもりなんだろう！今日の態度は何だよ！って怒ってくれて。

そしたら、私に告った彼が逆ギレして…

信じらんない！

MとM彼がいい雰囲気だったから、場に合わせて告っただけだ！別にアオイを好きな訳じゃない！って。

私！凄いショックで。

そしたら、先輩が、告った彼を殴って。

私、泣きながらアパートに帰った…。

そしたらね。

その先輩が来たの。

アオイ、大丈夫か？って。

私ずっと泣いてて…そしたら、その先輩がいきなり私を抱きしめて、キスされた…。

俺はアオイの事が好きだ

って。

…私ね。私ね。やられちゃった…。

もう訳わかんない…。

それで…中出しされちゃった…（泣）

もうわからない。ずっと今まで…

一人で泣いてた…。」

・・・・・・・・・・・・・・・・。。

朝。

巨大商店街を歩きながら、行き交う人達。

足早に通勤途中、すれ違うもの。

幼稚園、或いは保育園に急ぐ、子供連れ。。

俺は、そんな時刻の流れに逆らうように、その巨大モールの

中心で立ち止まっていた。

全ての思考は停止し、耳にあてた携帯はそのままにただ。。ただ嗚咽と共に、まくし立てるアオイの声だけが、その止まってしまった心を何度も突き刺していた。

## 第47章 綺羅と紛れて

ガード下の暗闇に 背中を丸めながら  
身を潜めてたけれど 目は夢を見てた  
夜も醒めやらぬ都会の 朝もやの中へと  
走り出してた奴を なぜ誰も止めない

少女は母親になり 何を無くしたんだろう  
そして 少年は何を 探してたんだろう  
今じゃ荒川の土手に 座って川を眺めてる  
宛名の無い手紙を 破り捨てながら

ゆるやかにくねり 河はさざ波立てて  
綺羅と紛れてく 悲しみも何もかも  
ゆるやかにうねり 河は流れ続ける  
綺羅と紛れてく 俺たちもいつの日か

\*\*\*\*\*

輝ける時代。

多くのものをなくしても、多くのものを探せる…そんなとき。

もう一度・そんな輝けるとき を求めてしまった事への  
咎めなのか。

それとも… ”愛すべき者達” への背信行為という罪科に  
よるものなのか。

どちらにせよ。甘んじて受けよう。

今そして、これから俺が受けるべき苦しみを。

\*\*\*\*\*

何秒…？何分…？

俺の思考は完全に停止していた。

「ス キップさん！きいてますっ！？」

アオイの怒鳴るような泣き声が 俺の心の沈黙を切り裂いた。  
何て、何て残酷な事実を 俺に突きつけるんだ！

俺の年齢がもしも、彼女に近ければ、俺は取り乱し、アオイに  
罵声を浴びせ全てが終わったんだろう。

「…話はわかったよ…アオイちゃん…とりあえず  
眠ったほうがいい。一睡もしてないでしょ？」

「私、眠れませんよつ。告った彼も許せないけど  
あゝ私なんでこんな事になっちゃったんだろう！  
もう、もう、誰も信じられない！」

アオイは興奮状態のまま話続けた。

俺の心は、鈍い痛みを伴いながらも今のアオイに何を話すべき  
なのか考え続けていた。

「アオイちゃん。判ったから。兎に角、落ち着く事。

俺も仕事の途中だから、夕方必ず電話するから…いい？」

「…はい。」

アオイのイベントは目前。

こんな事件が勃発し、果たして東京に来られるんだろうか？  
ズタズタにされた俺の心…。

その筈なのに、冷静に今後の事態

を憂慮する俺自身に、また、俺の心は傷ついていた。

「アオイちゃん。。。アオイちゃんには俺がいるから…」

やっこの思いで伝えた言葉。今の俺には精一杯の言葉。

「違うよ！ス キップさんは人のもんだもん！違うよ！」

俺が背負うべき、哀しみと苦しみの日々が、今、始まった。

## 第48章 同じ場所

その日。俺は一日中、悔しいけれど アオイの事が  
気懸りで、仕事の合間何度もメールを送った。

「今、MちゃんとMちゃんの彼が来てくれます。  
大分、落ち着きました。」

Mちゃんか。

俺には このMちゃんが存在が一番の元凶に  
思えて、冷静になったアオイには安堵したものの、  
心は晴れなかった。

この後。アオイとMちゃんは絶縁する事になるが  
これはまだ先の話。  
その絶縁理由が、今回の出来事と同様に俺の思考を  
停止させる事になる。

本業を終えた俺は、店舗のあるアキバにむかいながら、  
アオイに電話した。

「ス キップさん。。。もう私の事嫌いになりましたか？  
呆れたでしょ？怒ってるでしょ？」

アオイは、今朝のような興奮状態から、すっかり覚めていたが  
その言葉、その声は猛烈な自己嫌悪の最中にあつた。

「呆れてないです。怒ってもないです。ただ…やっぱり、



ショックだったし、哀しかったな。

アオイちゃん。もつとね…もつと自分を大事にしなきゃ駄目だよ。」

はい…。

消え入りそうな声で小さく答えるアオイ。

俺は、この娘がどんなに愚かしい行動をとろうとも、俺がどんな仕打ちを受けようとも、だぶん…全て許してしまう。。。

俺は アオイと話しながら、痛い程自覚していた。

現に、消え入りそうなアオイの返事を聞いた時、出来る事ならすぐに！すぐにアオイの元へ飛んで行き、ただ、ただ、優しく抱きしめてやりたいと思った。。。

「私…中で…出されちゃったの初めてで…  
もしも何かあったらどうしよう」

アオイの言葉は、知らず、知らず、俺の心を痛ぶる。  
これから先、アオイと俺の関係には、常にこの鈍い痛みが伴い続けた。

「アオイちゃん。良い先輩を装った”下半身野郎”の連絡先は判るね？兎に角、今後の事や、また接触してきたら、俺が話しをつけるから。それでいいね？」

「ス キップさん…。私って、ス キップさんから見たら幼いよね、子供だよな、呆れるよね！  
人を見る眼ないよね…。」

ス キップさんと告ってきたあんなヤツ比べて、でも、あんなヤツと付き合ってみようと思った私だけど

ス キップさんのとこ…戻ってもいいですか？  
怒ってると思うけど…」

アオイは普段、子供扱いされる事を嫌っていた。  
そんなアオイが、声を震わせ、俺にそう言った。

「アオイちゃん。俺はいつも言ってるでしょ？

#### 同じ場所

にいます。今までも。これから。ずっとね。」

この時の俺は、自分の意志で 同じ場所 にいるのだと思っていた。

ただ、これから続く苦しみの日々の中、それは間違いだと気づく。  
アオイへの想いは、俺の心を縛り、この場所 から立ち去る事を許さなかった。

アオイは、俺の答えに満足したらしく、徐々に元気を  
取り戻し、話はいつしか、間近のイベント、そして上京に  
及んだ。

アオイのオリジナル商品発売イベントまであと二日。  
それは再び、アオイが上京する事を意味していた。

## 第49章 最後の一日が…始まる

アオイのイベント…日曜日。

これまでの俺とアオイなら土曜日にアオイは上京、そして二人だけの 楽しい時間を過ごす。。。

今回の上京は、二人話し合った結果、日帰りとなる日曜日の上京になった。

土曜日の夜、アオイにはキャバクラのバイトが入っていたし、何より、俺自身バイトを休んでまで前日から上京させる事…アオイを説得する気力が萎えていた。

結果。

アオイは朝6時には、家を出て、タクシーで駅まで。新幹線へ。

今回の上京でアオイが望んだ場所は、麻布十番にある有名なパン屋さんだった。

ごはん嫌いのアオイの主食はもっぱら、パン。

そして、大好物の たこ焼き。

一人暮らしのアオイの食生活は、いつも俺を心配させた。

もう一つ彼女が望んだ場所。

六本木ヒルズ。

ここで、評判の中華が食べたいと。

六本木ヒルズ。

ここは、俺が年間300日以上通う 勝手知ったる場所。俺は喜んでガイド役を引き受けた。

でも。。。この事を後に後悔する…。

毎日通う場所。それは、俺の隣からアオイが消えてしまっても、歩かなければならない場所だとアオイが遠く離れてしまった後、気づいた。

今でも。

ヒルズの見慣れた風景は、季節と共にその姿をほんの少し変えてみせるけれど、アオイといった時間は確実にそこにあつた…。

ふと、あの楽しかった時間が蘇り、心に立つ小波が忘れかけた鈍い痛みを思いださせる。

上京の朝。

まだ、外は薄暗い6時前。

俺は家族に悟られぬように、何度もアオイとメールのやりとりをした。

「ス キップさん！外に出ただけど、タクシーが捕まらないです」

「ええ？大きい通りに出てみて？。タクシーいない？」

「いいいです…：しょうがないです。バスで駅まで行くので東京に着くの遅れます…」

俺は、その事は了解したものの ^^：マークを連発した。

途端にアオイはキレた。

「ス キップさん。^^;のマーク止めてくれませんか。  
凄く嫌な感じです」

キレた時のアオイの冷たいが視線が浮かび、俺は狼狽した。  
これまでも…そして、これからも…気分によってキレる  
アオイに、俺は常に狼狽し情けない程落ち込んだ。

こうして、恋人同士 としての 俺とアオイの最後の一日が  
始まった。

## 第50章　記憶の零

数週間振りに再会した俺とアオイ。

朝の新宿ホテル街で、行き交う人達の怪訝な顔をよそに二人大笑いしたあの日。楽しかったあの日。ずっと。。。ずっと昔の出来事のように思われた。

それでも。アオイの髪…手のぬくもり…香り。  
また、俺の元に帰って来た　小鳥。

ここ数週間の辛い出来事は、目の前のアオイを見つめた瞬間、記憶の底に、静かに沈んでいくのを感じた。

朝　9時。東京駅。

新幹線の改札から現れたアオイは、いつものように少し俯いていたけれど、例のバイトのお陰なんだろう。。。以前のようないきなり素振りはなく、すぐに俺の眼を見てこう言った。

「ス　キップさん。私が怒ったメール送ったから、凹んでるでしょう？」

ス　キップさんは、すぐに顔に出るから判り易いですよ」

そう。

アオイは俺の全てだった。

いつしか、アオイの俺への気持ちの変化を恐れ、オドオドとしていたのは、俺の方だったのかもしれない。

俺たちは、いつものように手を繋ぎ、山手線のホームへと

向った。

浜松町から地下鉄で麻布十番へ。

アオイが楽しみにしていたパン屋さん。

麻布は 昔 と 今 が共存する町。

昔ながらの風情ある家並みと、都心の一等地、ビジネスの中心を成す街でもある。

日曜の早朝。

ビジネス街という、もう一つの顔はひっそりと眠りつづけたまま、静かな 昔 が息づいていた。

俺とアオイは、すれ違う人もまばらな、そんな町並みを  
楽しむように、ゆっくりと歩いた。

お互いに方向音痴な俺たちは、メモを頼りに店を探す。

「ス キップさん！あつた！あれですよ。きっと！私が見つけた」

アオイは嬉しそうに声を上げ、その目的の地へ足早に向かった。

出来たてのパンの香り。

多種多様のそれらを、アオイは小さな喜びの声をあげながら  
一つ一つ選んでいく。

結局。両手、袋いっぱいパンを買い込む事になった。

「これはあ、明日の朝ごはんにしてえ これは、学校に持って  
いくでしょお」

麻布の町を再び歩き出した俺とアオイ。

彼女は歩きながら、袋の中を眺めては、嬉しそうに俺に向かって話していた。

堪らなく愛しい存在。

何があっても俺はこの娘を

愛し続けるんだろうな…。

時折、記憶の底から漏れてくる、辛い出来事の雫を感じながらも俺は、そんな事を考えていた。



## 第51章 アオイ色

日曜日の朝。

麻布から六本木への緩やかな坂道を、俺とアオイは歩いていた。

不思議な感覚。

俺は20年近く、この六本木という街に通っていた。もちろん。仕事。

ところが、俺の右手には営業鞆は無く、柔らかく小さな手が握られている。

20年通い続けた街。見た事も無い看板。お店。俺の見てきた 六本木 という街は、小さな手の温もり、ただそれだけで、俺にとってのその風景を一変させていた。

六本木ヒルズ。

毎日通う見慣れた風景。

以前、アオイに携帯メールで写真を送った事があった。その時から、アオイは、次のデートはヒルズに決めていたらしかった。

ヒルズの全貌が視界に入る頃、アオイは呟いた。

「ス キップさん。。。私って何色かな？」

丁度その頃、アオイのサイト掲示板では、アオイのファン達がアオイを色に例えると、色。そんな話で盛り上がっていた。

俺がしばらく考えていると

「私ね。本当は、ピンクとか、女の子らしい 可愛い色に  
なりたい。」

でも今の私って、真っ黒か、澱んでる赤です…」

「アオイちゃん。そんな事…ないよ」

20才の娘のこんな言葉に、俺は一瞬驚き、こんなつまらない、  
慰めにもならない、そんな台詞しかはけなかった。

南翔饅頭店の小籠包。

六本木ヒルズでも、人気の高いお店とメニュー。

アオイの楽しみにしていた、この店の前まで来ると、  
開店30分前、既にたくさん人達が行列を作っていた。

俺たちはその最後尾に立ち、開店を待つ事に。

並ぶ という行為。俺には酷く苦手な作業だった。

これまでは…。

ただ、今、この時は、視線を向ければ、そこにアオイがいる。

このまま、時が止まって欲しい。

今 という幸せな時刻 が永遠に続いてほしい。

出来る事なら、この場所に。

アオイと二人、いつまでも

並んでいたい。

アオイの笑顔を見ながら、俺はぼんやりとそんな事を考えていた。



## 第52章　想い出の地

南翔饅頭店の小籠包。

アオイも傷つき。そして、俺も深く傷ついた  
あの出来事。

その後、沈んだアオイが唯一、明るく弾んだ口調になる時  
それが　南翔饅頭店の小籠包　の話をする時だった。

いよいよ開店。

開店を待っていた多くの人達と一緒に俺とアオイも  
店内へと通された。

俺とアオイの年齢差から来る食の好みの違い。  
俺は正直…油を使った料理は、その匂いだけで満腹感で  
いっぱいになる。

アオイは、常に　中華　や　ステーキ、若いゆえの食欲を  
満たす場所へと行きたがった。

席に通された俺達は、詰め込まれるように座らされ  
せかされるように、2種類の小籠包、ビール、エビアン  
を注文。

殆ど待つ事なく、そのどれもがすぐに運ばれた。

アオイは、歓喜の声を上げ、早速、デジカメで　その評判の  
小籠包を撮影。

彼女は、自ら、”私ってひっきーでヲタク”と公言：

だからこそ、永い年月、ネ トアイルを続けていられたのかもしれない。

「美味しい〜！凄く美味しいですつ。ス キップさんも早く食べて〜」

俺は…アオイの、この喜んだ顔、嬉しそうな顔が何よりも！何よりも大好きだった。

この笑顔があれば、何も要らない。そう思える程に。

俺は、一口、口をつけ、後は黙々とビールを流し込んだ。

「アオイちゃん。いいから、ほら、俺の分も食べて食べて」

その後、アオイは大好きなマンゴープリンも平らげて嬉しそうだけど、少し怒って言った。

「ス キップさんの嫌いなところ…いつこ みつけた。自分で食べない！何でも私に食べさせる。もう、ホント、折角ダイエットしてるのにつ。」

これは俺の女性に対する嗜好の問題か？

アオイには、ダイエットは必要無いと言い続けたけれど彼女は聞く耳を持たなかった。

「失礼ですけどおゝス キップさんの時代の女性と今の私達の女性の美意識は違うんですう！」

ス キップさんの時代のタレントさんって結構皆、ぽっちゃりしてますよね？

今は駄目です。それじゃあ」

アオイには、こんな事をよく言われた気がする。

二人。街を歩けば

「ス キップさん、あの、ほら少し前歩いてるロングの人、どう思います？やせてる？太ってる？」

俺は思った通り

「うん。普通かな。俺はあのくらいがいい」

「ああ、やっぱり！ス キップさんの言う事はあてに出来ないもう、信じないっ。ダイエット頑張ろう」

俺達はその後、ヒルズを散策。

楽しい時間 は、容赦無く過ぎていった。

俺とアオイは、ヒルズの長いエスカレーターを下り、日比谷線へと向う。

今、現在。俺は毎朝この道程を往復する。

朝のせわしないひと時…

フツとした瞬間に、

あの柔らかい小さな手の感触が甦り、ほんの少し俺の心を揺さぶる。。。

### 第53章 嘘…嘘…嘘…

俺とアオイは、六本木から地下鉄に乗り込み、秋葉原へと向っていた。

日曜日の午後。

毎朝、通勤ラッシュ、すし詰め状態の日比谷線と本当に同じ電車なのか？

そう思う程、閑散とした車中…。

俺とアオイは、7人がけの長イスにゆったりと腰をおろした。

一車両に数える程しか、乗客はなく、その長イスは二人の貸切。

その会話を気にする必要もあまりなく思われた。

「アオイちゃん。今日は日曜日だし、俺は明日、普通に本業の出勤が待ってる。

イベントの後、どうする？ たぶん、5時から6時の間に終わると思うけど…」

「うん。どうしようかな。

泊まれないんですよね？ ス キップさん…

私も明日学校だし…」

俺は本当に泊まれなかったのか？

もちろん、日曜日の外泊は、未だした事は無かった。  
ただ、これ程、愛していたアオイとの再会。  
そして、今日という日が終われば、またいつ会えるのか。

俺は…疲れていた。

新しい事業を興して数ヶ月。もちろん休み等ない。  
本業も疎かに出来ない。  
アオイの商品発売へ向けた準備。これもやはり、一人で  
こなさねばならなかった。

そして、何より。。。アオイ本人を愛してしまったが為に  
直面した様々な出来事…。

この頃、俺は、どうしようもなく疲れていた。

「でもね。私、二人で少しゆっくりしたいです」

「じゃあ。新幹線の時間まで…ホテルで休む？」

こうして、俺とアオイは、二人っきりの最後の時間を  
この夜、過ごした。

「問題は、イベントの後だね。アオイちゃんファンが  
新幹線乗り場まで、見送るとか・言い出しかねないでしょ？  
特に　さんとかさ」

俺とアオイはイベントの後、いかにして二人きりになるか  
考えた。



結局出した答え。

それは…。

アオイの両親も上京していると嘘をつく事。

両親は現在、浅草見物中　と嘘をつく事。

イベント終了後、俺はアオイを両親の元へ送り届ける  
と嘘をつく事。

アオイに逢うため、名古屋からやって来たファン。

アオイの商品に十数万…突っ込んだファン。

そして、このイベントを支えてくれたスタッフ　俺の友たち。

この日、アオイのイベントに関わった全ての人たちへの嘘。

俺は。

それでもいい…と思った。

世の中全てが　素っ気無い他人だけで埋め尽くされ様と、

俺の横に　アオイ、一人が居てくれればそれでいいと思った。

こんな嘘をついてまで、アオイと二人きりの時間を大事にした俺。

皮肉にも、この日の夜が、俺とアオイ　最後の二人きりの夜に  
なるとは。

車中、アオイの笑顔を見続ける俺には想像も

出来ない哀しい事実が待っていた。

## 第54章〜プライド〜

今回のイベント。

アオイからの提案もあり、彼女自身が手作りケーキを持参。イベント参加者と共にジャンケン大会し、勝者にその貴重なケーキが手渡される事になった。

アオイの商品を購入し、アオイから その商品にサインを貰い、参加したアオイファン達は、彼女とのジャンケンに一喜一憂した。

アオイの熱烈なファンであったK氏。

彼は、既にアオイ商品に十数万突込み、この日もアオイ手作りのケーキを、その大勢の参加者、誰よりも熱望していた。

アオイ自身、このK氏が熱烈な自分のファンである事を自覚していた為、ジャンケンに関しては。。。

「Kさん。私、ジャンケンする時って、無意識のうちにグーから出しちゃうんです」

Kさんには、手作りケーキを食べて欲しい・・・。

アオイのこんな想いも、すっかり、本人を目の前にしたK氏には興奮のあまり聞えなかったようだ（苦笑）

…チョコキ。

K氏の落ち込みようといったら、見てられない程のものだった。

結局。。。

手作りケーキが2つ程、残った。

イベント参加者達は、いくつ残っているのかは知らない。

そのうちの一つを、アオイの提案によって、全員でのジャンケン大会勝者に進呈する事になった。

「はい。皆さん。アオイちゃんの好意で、敗者にも、もう一度チャンス！です。ジャンケンやりまーす」

俺の呼びかけにK氏は、俄然、張り切りだす。

ここで、或る出来事をアオイは目にし、機嫌を損ねた。

K氏。敗退…。先ほどより更に激しく落ち込む。

もう一つ残ったケーキ…。

俺はアオイに目配せした。

「もう一回ジャンケンやる？」

アオイは、俺をキッと睨んで、誰にも気づかれぬ様、小さく首を振った。

イベント終了。

俺は、参加者、友人達に予定通り… 嘘をつく。

「アオイちゃんの両親が浅草で待ってますので、俺はタクシーで

彼女を送っていきます。今日は皆さん。ありがとう」

アオイと俺は、皆に見送られタクシーに乗り込んだ。

「ス キップさん！私、もう、イベントやらない！」

「どうしたの！？さっきから様子が変だと思っていたけど…」

「だって！最後のジャンケンの時、ス キップさんが皆に呼びかけて

いるのに、無視して、違う話に夢中な人が何人かいました。

私のケーキなんて。。。どうでもいいみたい…」

ネッ アイドルとして、数々のメディアに登場した彼女のプライド。

要は、自分のイベントに、自分だけに、夢中でない、そんな彼らが許せなかったらしい。。。

タクシーの中。やれやれ…とは思ったが、俺は冷静に彼女に話をした。

「アオイちゃん。これから、何回もイベントやれば、もっと大勢の人たちが集まるようになるでしょ？」

皆が皆、Kさんのように、アオイちゃんだけ大好きな人達だけ集まるわけじゃないと思うよ。

どんな娘なんだろう？って好奇心だけでやって来るアイドルヲタだっていっぱい来るようになるだろうし。

今日だって、その人達以外は、皆、アオイちゃんのケーキに大喜びしてたじゃん。機嫌直してっ」

アオイは、納得はしないものの、小さく頷くと、こう言った。

「この、一つだけ残ったケーキはKさんにあげてくださいね。あんなに欲しがってくれたのに。ジャンケン勝てなくて。

だから、ス キップさんが、もう一回ジャンケン？って目配せした時、断ったの。

Kさんにあげよう って決めてたから」

それは、アオイの優しさ？

というよりも、彼女の プライド を最も満足させたK氏への褒美だったんだろう。

それでも、俺は、K氏の喜ぶ顔が目に見え、苦笑せざるえなかった。

タクシーは、鶯谷駅周辺を走っていた。

「運転手さん。この辺で。」

アオイと俺。” 最後にお互いを愛した” 夜 が始まるうとしていた。

## 第55章　帰りたくない

夕暮れの鶯谷。。。

駅周辺のラブホテル街を、俺とアオイは彷徨っていた。

前回同様に、アオイは気にいったホテルを精力的に探す。

俺は彼女に引きずられる様に、その周辺を徘徊した。

「ス キップさん。やっぱり、私、最初に見た部屋にします  
あんまり、気にいった部屋なかったなあ」

彷徨う事、十数分。

前回の新宿から比べたら、まあ楽か…。

俺は、ホッ　としつつ、再び、最初に見たラブホテルへ足を向けた。

「あゝあゝ、やっぱり、ちょっと狭いなあ。」

アオイは少し不満げにそう漏らすと、早速、部屋の中を物色  
一通り、その作業が終わると、ベットに腰掛けて、そんな  
アオイの様子を黙って見ていた俺の隣に座った。

俺達は、あの新宿の夜以来…お互いの唇の感触を  
確かめあった。

「ス キップさん。イベントも終わって、ホッとしたら、私  
おなか　空いちゃったっ」

ホテルに備え付けのメニューから、アオイの食べたいといったピザを注文。

「ス キップさん。一緒に食べましょうね。ちゃんと食べてくださいね。いつも ”アオイちゃん 食べて、食べて” とか言って、自分は全然食べないんだもん。」

俺は思っていた。

そう。。。アオイと一緒にいる時、俺はこの娘への想いで俺の全て が満たされていた。食欲など 入り込む余地の無いアオイで いっぱい だった…。

一枚のピザを二人で食べ、シャワーを浴びて、俺達はベットに身体を投げ出した。

「アオイちゃん。今度のイベントは年末になっちゃうねしばらく会えない…か…」

「来月ね。私の大学の文化祭なんだあ。ス キップさん来ればいいのに…。私ね。お店やるんだよ」

俺は無言で。

アオイにキスをした。

そりゃ行きたい。明日だって、明後日だって、いつだって。

俺は、そんな 忤ならない今の自分の立場と感情を、アオイのその柔らかな唇。。。そして、アオイ にぶつけた。

俺は。。。心も身体も疲れていた。

疲れていたはずなのに今、アオイを夢中で愛していた。

一緒に過ごせる時間が、限りなく少ないこの夜。

俺もアオイも、無情に流れる時間に反発するように、お互いを求め合った。

「ス キップさん…私…帰りたくないよ…」

アオイは、俺に抱かれながら、何度も、何度も囁く。

俺はその声を聴きながら、その都度、とめどなく溢れる

アオイへの 愛しい感情を 彼女を愛し続ける事で開放していた。

二人。ホテルの天井を見つめていた。

「ス キップさん。新幹線…何時まであるかな。」

私…最後の新幹線で帰ろうかな。

携帯で時刻表みれるかな…」

「アオイちゃん。俺さ。来月必ず、アオイちゃんに会いに行くから。必ず！約束するから。」

「はい。」

じゃあ、ス キップさん。うちに泊まってね。私がごはん作るから。ホテル代もかからないし…ねっ。」

アオイは裸のまま、すうっと立ち上がり、大きな鏡台の前に立ち、髪形を直した。



「ふふふっほらっ！」

アオイは、普段から俺が好きだといっていた髪型で  
につこり笑って振り返った。

「アオイちゃん…」

俺の愛したアオイ。

大好きなアオイ。

たら？れば？

この夜。もしも帰りたくない と言ったアオイを  
受け入れていたら…明日訪れる哀しい結末は知らずに  
済んだのかもしれない…。

いや。

いずれは、訪れたであろう 結末 だった。

それが、妻帯者である俺と 二十歳の女子大生アオイの運命  
だったんだろう。

## 第56章 突然のさよなら

何度も見送った東京駅。

新幹線の改札。

「アオイちゃん。必ずね。。。必ず来月行くから」

別れの際、いつも気丈に振舞うアオイが、この日は珍しく沈んでいた。

「はあ・・・あ・・・」

そんな溜息を何度もつき、その都度、俺の寂しさも増していった。

何も変わらない 別れ の風景。

アオイは、一度も振り返らず、その人ごみに紛れ、俺の視界から消えていった。

新幹線の中、そして、彼女が無事、帰宅。そんなメールのやりとりも、今まで繰り返してきた 俺とアオイの風景。

何も…変わらない…何も…。

\*\*\*\*\*

翌日。

アオイからメールが届く。

「ス キップさん。昨日は有難うございました。  
実は、今日、元彼とこれから会う事になりました。  
行ってきます」

俺には、何も…理解出来なかった。

元彼。

そう、俺との関係が始まるまで、3年越しで付き合っていた元彼。

別れ際、アオイに悪態をつき、彼女を傷つけた元彼。

何故………？

「…アオイちゃん…ごめん。俺には理解できない。  
なんで？なんで、元彼と…？」

「ス キップさんには言わなかったけど。。元彼からは  
何度も電話があつて…最初は無視してたんだけど  
だんだん可哀想になっちゃった…。

それで…

私にも、わかんないです…。

たぶん…寂しかった」

「ちょっと待って。やっぱり、俺にはわからないよ。  
もう元彼とは、会わないって。気持ちも残ってないって  
言っただじゃない。アオイちゃん…どうして…それは  
嘘だったわけ？」

アオイはキレた…。

「元彼と戻っても、戻らなくても、もう、ス キップさんとは  
終わりにします！」

俺はこのメールを受け取った時、アオイとの関係が  
終わってしまう…という事実よりも、俺の彼女への  
想いが、こんな 簡単なメールのやりとりで終わってしまう程  
アオイの中で 「小さなもの」だったという事に、哀しみ  
をおぼえていた。。

「アオイちゃん…本当にそれでいいの？  
本当に。俺達ってそんな軽い思いだけで  
繋がってきたのかな。そうだとしたら哀しすぎるよ。。。」

「わかりました。  
約束してください。  
私がいい って言うまで、私にメールはしないでください。」

アオイからの凍てつくようなメールを、俺は黙って何度も  
読み返していた。

全てが終わった…。

俺の中で この数ヶ月間、絶え間なく息づいていた  
暖かな炎が、ゆっくりと消えていくのを感じていた。  
そして。

次々と訪れる 哀しみ と 孤独 の波に  
俺は耐える術を知らず、ただ流れるでる涙を  
拭わぬ事で、その感情を放置した。

どのくらいの時間がたったんだろう。

俺の心は止まっていた。  
メール着信。

「ス キップさん。ごめんなさい。今も大好きです。  
とにかく元彼とは約束したので、会ってきます。  
来月、来てくれるの…楽しみにしています。  
ごめんなさい」

このメールの後、アオイは俺との連絡を絶った。

俺は、決して癒される事の無い 哀しみ の中、彼女からの  
メールをひたすら待ち続けていた。

## 第57章　ひとりきり

アオイのイベントが始まった。

大勢のファンに囲まれ、彼女は嬉しそうだ…。

それを少し離れたところから、見つめる俺。

渋谷かな？原宿？それとも、アオイが食べたがっていた、北京ダックでも行こう…。

俺はイベント後のアオイとのデートプランを立てる。

イベントが終わり、俺はアオイの元に近づく…。

有難うございました。お疲れ様でした。

アオイは 他人の顔 で、俺にこう告げると、俺の知らない車に乗り込み、その場を去っていった。。。

追いかけよう！！心はそう思っても、身体が全く動かない。

俺はその場に立ち尽くすしかなかった…。

\*\*\*\*\*

哀しい夢を見た。

枕元に置いた携帯を手にとる。

もちろん、そこには、メール着信を表すマークは無かった。

今日も抜け殻の一日が始まる。

朝のおはようメール、昼の、夕方の他愛ないメール、そして、夜の電話…。

明け方のバイトからのお帰りメール。。。。

一日の全てが、アオイで始まり、アオイで終わる。

つい先日までの、そんな 愛しい日々は、もう二度と戻って来ない。

俺は全ての感情を殺して、毎日を過ごしていた。

何を食べても味すらわからず、酒は水の如し。。。。

ただ…黙々と仕事をこなした。

不覚にも。感情がほんの少し、溢れただけで、俺は 哀しみだけの世界に一人取り残された。

限界。。。。

一体、何日経ったんだろう。

俺は、アオイとの約束をやぶり、カレシ としての最後のメールを送信した。

「アオイちゃん。ずっと、待ってた…」

最後のメール。アオイから連絡の無い日が続き、それはもう俺にとっての 哀しい結末 を充分に理解させる出来事だった。

それでも。

それでも。俺は何かにすがり、何かを期待していた。

「ごめんなさい。（元彼と）戻りました。」

俺の愛した小鳥　が、俺の元から飛び立っていった…。

俺は、俺がまた　哀しみの世界　に一人置き去りにされた事実に  
気づく前に、迅速にそして、冷静に、数週間前書いた  
さよならメールを再び書いて送信した。

そう、俺はいつだって、一人だったじゃないか…。

また…一人に戻っただけさ…。

そんな　想い　とは裏腹に、もう一つの感情が　俺を無防備な  
子供に戻し、湧き出る涙を拭う事さえ許さなかった。



## 第58章　悪魔

アオイと俺の　ひとつ　の関係は、こうして終わった。。  
二度と戻らない　愛しい日々…。

ただ、俺達には、もう一つの関係が残されたままだった。  
そう。契約者と被契約者。

年末には、クリスマス商品の発売とクリスマスイベント  
が内定していた。

戻りました。

そんな　最後のメールを受け取り、抜け殻の毎日を過ごす俺に  
時刻は待つてはくれなかった。

今まで以上に、お互い意識して　敬語　を使い、仕事に関しての  
メールのやり取りを重ねる。

その都度、襲う強烈な　痛み　は、まるで無限地獄のように  
俺を容赦無く叩き潰した。

「日数がなさすぎます」

「写真は撮ったけど、どれも気にいりません」

以前に増して、アオイの言動は、俺を困らせた。

そんな或る日。

電話での打ち合わせ。

俺は、あの日　以来、彼女の声を聞く事になった。

アオイの声。

未だ俺の心にしっかりと刻まれている

愛しいアオイの声…。

でも。

今は、その声を聞く事が、俺を一層苦しめる、辛い出来事でもあった。

「アオイちゃん…」

「こんばんは。お久しぶりです」

遠い昔に聞いた、俺の愛した声。感情が溢れるのを必死で押さえた。

「スキップさん。私、この企画、協力できません！スキップさんに、私の衣服触らせたくないし！」

企画…。新商品を作るにあたって、アオイから、とある私物を提供してもらう。そんな計画が進行し、アオイの了解も取り付けていた。

それが突然の拒否。アオイは明かに怒っていた。

久しぶりに聞いた 愛しい声。

その声が…俺に対しての怒りの声。

俺は、狼狽し、毎日のように訪れる 哀しみの波にまた、のまれていた。

「…何で？アオイちゃん？何で？」

「ス キップさんは、好きな子が多くていいですよね！」

この一言で、全て理解した。

俺のweb日記。

ここで、俺は、或るタレントさんの事を好意的に書いた。  
好きだ とも書いた。

他愛無い事。

アオイには、自分が振った 俺 という人間は、いつまでも、ア  
イ

を想い、落ち込んでいるべき。との思いがあつた。

嬉々として、タレントとはいえ、他の女性を語る 俺 は許せなか  
つたんだろう。

そして。。俺はまたアオイに語らねばならなかった。

今でも。どんなにアオイを思っているか

今でも。どんなに辛い日々を送っているのかを。

俺がどんな思いで、この事を語らねばならなかったか…。

悪魔なのか!?

俺の天使 は、遠く羽ばたき、時折、気まぐれに舞い戻る彼女は  
天使の姿をした悪魔…。

俺のアオイへの 愛情 が変わらぬ事を確認すると  
彼女の機嫌は、すぐに戻り、企画の話はまた順調に進みだした。



## 第59章 それぞれのその後（前書き）

当章を含め、『蒼日記』も残り3章になりました。  
ここまでお読みくださりありがとうございます。  
どうぞ最後までお付き合いください

## 第59章 それぞれのその後

俺は日々のせわしない生活の中、その心を自然治癒に委ねていた。

そんな或る日、会社の昼休み。

突然、携帯が鳴った。メールではなく着信。

アオイから…だ。

俺は同僚のいる部屋をすぐに飛び出し、急いでその電話を耳元に当てた。

「どうしたの！？アオイちゃん？」

「どーしてー！ス キップさん！どーして！そんなに冷静で元気なんですかつ！？どーして！」

アオイは、興奮状態で取り乱していた。

「どうして？って…。どうしたの？何があつたの？」

「ああ…もう最悪！私、最悪！ああ…もうっ！」

それから、俺はアオイの興奮が少し収まるのを待って彼女にゆっくりと話すように諭した。

何て事を…。

「Mちゃんっているでしょ？私の親友の。

彼女ね。カレシに言われて、キャバ辞めたの。

だから今私一人でキャバのバイト続けてるんだけど。

そしたらね。Mちゃんのカレシから電話があつて  
ちよつとMの事で相談したいって。

だから、この間、Mちゃんのカレシと会つた…。

そしたら、そのカレシがね。

俺は本当はMより、アオイが好きだったんだ

って。ただ、アオイには東京に不倫のカレシがいるから  
諦めてたって。

でも、Mから、私とス キップさんが別れた事聞いて、告白  
したって。

それでね。。。それで。。。。

私ね。。。そのMちゃんのカレシと昨日…しちゃった…。

そしたら、そのカレシが Mにきちんと言つて。。。。

あ……私最悪！！親友のカレシと  
しちゃった！！Mちゃんとはもう終わり…」

悪魔…か…。

何故！？何故！？俺にそんな事を言うんだよ！

俺は、容赦無く、俺の心を抉り続けるアオイの声を聞きながら  
そう思っていた。

「だって！誰にも言えないんだもん！ス キップさんしか言える  
人いないんだもん！」

俺の心の叫びを見透かしたように、アオイは最後にこう言い放った。

そうか。。

そうだよな。俺にしか言えないよな。

そんな事…。

俺の中で、何かが弾けていた。

この娘を愛し続ける事。それは、たぶん、そういう事なんだ。  
判ったよ。何でも言ってこい。何でも聞いてやる。

たとえ、それが俺にとって、どんなに辛く、残酷な事だと  
しても、全てのアオイ を受け止めてやる。

例え…二度と 愛し合う事は無くても。

「アオイちゃん。Mちゃんのカレシと、付き合う意思はないん  
だね？今ごろ、Mちゃんも事実を知っているだろうね。

たぶん。。。謝って許してくれない…と、俺は思う。

それでも、殴られるの覚悟で、きちんと謝って。

アオイちゃんのMちゃんへの けじめ はつけないとね。」



昼休みの時間は、とくに過ぎていた。  
アオイと俺の物語は、まだ続いていた。。。

## 第60章　憔悴

アオイはMちゃんから絶縁という罰を受けた。  
仕方の無い事。

それでも、俺はアオイが心配でならなかった。

同時に進行していた、クリスマスのアオイ商品に使う彼女の写真。  
期日は迫っていたが、彼女から、なかなか素材が上がらず、  
また、俺たち二人はギクシャクしていた。

電話でのやりとり。

「ああゝス キップさん。今のカレシさあ……。もうね。

ストーカー並だよ。俺のいう事聞けないなら、キャバのバイト  
の事、両親に言う」とか言って。

やっぱり、別れたいなあ……。なんて。

でも、そんな事言っと、お前を殺して、俺も死ぬ」とか言うし。

可哀想だから、戻ってあげたのに。」

可哀想だから戻った…。

その程度の感情に、俺という存在は

アオイの中で捨てられたのか…。

彼女の言葉は、いつもいつも俺に　哀しみと痛みを同時に  
与えた。

それでも。

アオイと今も、こうして繋がっているという事実には、  
俺は情けない程、満足していた。

クリスマスの素材は、デザイナーに迷惑をかけつつも、締め切り当日、

約束の昼12時にようやくデータが彼の元に渡った。

俺は、ストーカーカレシとの事を屈辱を感じながらも、心配し、連絡をとる。

「あつ！今、話せません。カレシと一緒になんで」

心配した俺は一体：何だったのか・・・？

全てが終わったあの日から、気が付けば、毎日が アオイに費やされていた。

「私。。今学校でも、仲間外れにされてます。

Mちゃんが、私と仲良しだった子、皆、仲間にしちゃったんで今：いつも一人ぼっちです」

「前にあのMちゃんと四人デートで告ってきた男、覚えてます？あいつが最近、夜、酔っ払ってうちの戸、バンバン叩くんです。アオイ！アオイ！って叫びながら。」

.....

俺は、そんなアオイからこぼれる言葉を聞く度に、心配し、何か、何か、力になれる事はないかと模索した。

と、同時に身体も心も憔悴しきっていく自分を感じていた。

誰かに.....

誰かに・・・。

俺を救って欲しかった。

俺をアオイのいない世界に連れ出して欲しかった。

そんな時。あまりに様子のおかしい俺に気づいた友人からメールが届いた。

「ス キップさん、どうしました？最近変ですよ？」  
デザイナー氏。

「・・・・天使はね・・・・悪魔・・・・だった・・・・」

俺の全ての感情が、この一言に集約され、口をついて出た瞬間、俺は、泣き崩れていた・・・。

## 第61章 二人じゃいられない

全てを知ったデザイナーT氏。

「あのさあ。スキップさん。そんなのさ。ただのヤマンですよ！」

その後もT氏は、ことある毎言い続けた。

「スキップさんが門戸を開けている限り、また、彼女は同じ事繰り返しますよ。」

もう、思い切って契約も全て切りましょう」

再三の説得…。

それでも、俺には…出来なかった。

愛する事って。何？

愛してくれるから愛するのか。。。

違う違う。

相手を想い、慈しみ、そして、心の底から大切に思う。

人間に与えられた愛する という心。

アオイはまだ知らない。

俺は、アオイに 愛する という事がどんなにすばらしい事なのか知って欲しかった。

人を愛した時に、生まれる様々な感情を知って欲しかった。。。

12月。

アオイと俺は久しぶりの再会をはたした。

もう一度、池袋のお店にいきたい。

もう一度、麻布十番のパン屋さんにいきたい。

俺たちは、あの時のように、二人…

まるで、あの時のデートのように二人だけの時間を過ごした。

ただ…

麻布十番の町並みに、数ヶ月前の輝きはなく、華やかなサンシャーンも、何処か、よそよそしい都会の匂いがした。

魔法の手は、どんな風景も、輝きを与えてくれた。

手を伸ばせば、すぐに届くアオイの柔らかで小さな手を握る事は二度と無かった。

クリスマスイベント後。。。

「アオイちゃん。アオイちゃんは、俺の笑顔、好きだって、前に言ってくれたよね。」

だから、俺はね。どんな時だって、これからもアオイちゃんの前では、機嫌の良い笑顔のス キップ でいようって、決めてたんだ」

「ふーん。じゃ、ス キップさんは、今まで我慢して私に笑顔作ってた時もあつたんだね」

これが、アオイと交わした最後の言葉。

12月25日クリスマスの夜だった。

アオイ。 21歳。

まだ、彼女は本当の 愛 を知らない。

\*\*\*\*\*

二人じゃられない

隠しきれない これ以上だませやしない  
キミにはもうオレなんて 必要じゃないからさ

気づかぬうちに 時間は流れていたけれど  
そばにいても届かぬ声 このままじゃられない

もしもいつか また誰かと  
出会いがあるというなら  
ただ記憶の片隅にでも 住まわせておいておくれよ

あの日の出会い キミは世界中の悲劇を  
背負いこんだような顔して オレのこと見上げてた

幸せだとい

これからキミがたどる日々  
それが今の偽りの無い想い and I Say Good by

もしもいつか また誰かに  
助けを求めたいような  
そんな時が来たならすぐ 気楽にたずねてきてくれよ

もしもいつか また誰かと

出会いがあるというなら

ただ記憶の片隅にでも 住まわせておいておくれよ

f i n



## 第61章 二人じゃいられない (後書き)

最後まで御付き合い頂きありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3820d/>

---

蒼日記

2011年3月24日23時37分発行